注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
Ｄ．Ｃ．Ⅱ～初音島に転生した転生者～

【作者名】
もりっち

【あらすじ】
目が覚めるとそこには髭長のじいさんが立っていた。

「君を間違えて殺してしまった」

…？

じいさんが訳の分からないこと言ってるわ。

そんな俺の新たな人生が始まる小さな始まりにすぎなかった。

※この小説はにじファンから移転した作品です。
また，ご意見・感想等お待ちしています。

じいさんとの出会い

真っ白な何もないところ。目が覚めるとあまりの明るさに目がなれなかった。

「なんだここ?」

俺はどうしてここにいるんだ?心の中で色々考えていると

「ここは天国に近い場所じゃ」

急に髭長の年老いたじいさんが現れた。脅かすなよ。

「わしの手違いで君を間違えて殺してしまった。君には今から転生してもらう。」

は?何言ってるのこのじいさん?俺が死んだ?

なんかのドッキリかこれ?

「あいにく本当なんじゃ。すまん」

じいさん、俺の心の声読みやがったし!!

まじドッキリじゃないのかよ。

こんなの受け入れるしかないのかよ。

「ちなみに君はじいさんだと思っているがわしは一応神様だからの」

「何から何まで訳わかんねー。」

「本当にすまん。転生特典に願いを3つ叶えてやるからおとなしく受け入れてくれ。」

なんとまぁ。話が急すぎてついていけない。転生？はあ？

アニメとか漫画じゃありそうだけど実際体験すると混乱するよな。

「どうしても今すぐ転生しないといけないのか？」

「鋭い所につく奴じゃの。今すぐにとは言ったがこの世界ではずっとはいられない決まりでな…」

遠回しに今すぐにではないということか。話を深く聞いてなかったら今すぐに行くとこだったわ。

「ちなみに転生先はどこ？」

「D．C．Ⅱの世界じゃ。決定事項でな。なんじゃ不服か？」

…まさかあの一年中桜が咲いている世界だなんて。たしか桜の木にバグがあるんだったけ？

あんまり深くは知らないがそんな話だったよな。アニメちょっと見といて良かった。

「…分かったよ。けど少し時間をくれないか？俺今すぐに行きたくないし」

ダメもとで行きたくないアピールをしてみた。無理でも言うだけいってみた。

「かまわんぞ？しかし何回も言うがずっとは無理だからの」

「いいのか？まじでいいのか？」

「じゃが、わしの手伝いをしてもらうぞ。それが条件じゃ」

…条件付きだが向こうの世界にさっさと行けと言われないだけましか。

「分かった。じゃこれからお世話になります」

一応目上の人なので敬意を払った挨拶にしてみた。

これから俺どうなるんだ？

じいさんとの別れ

じいさんと出会って1年くらい経つかな？時間経つの早すぎ？そこは目をつぶってくれ。

じいさんの話によると、向こうの世界ではもうさくらさんと義之が出会うぐらいまで進んでるみたいだ。

このままここにいたいのが本音だが最近じいさんが急かしてくる。

後、じいさんの話によると俺以外にも転生者が一人いるみたいだ。なんとまあ。素直に受け入れて速攻旅だったみたいだが…。

「お主には色々世話になって名残惜しいがそろそろ転生してもらうぞ」

「もう少し待ってくれないか？あと1週間…いや、7日でもいい」

「どっちも一緒ではないか!!」

「あっ。バレた？笑」

1年もいればじいさんとは仲良くなれた。しかし今回ばかりは許してくれなかった。

「今回ばかりは許せれんのじゃ、このままでは、お主は転生しないまま消えてしまうからじゃ」

なんとまあ。強制的になりそうな展開だな。行くしかないか。

「…分かったよ。じいさん。今までありがとうな。ここでの暮らし楽しかったよ」

「わしも楽しかったよ。」

悲しそうな顔をしながらじいさんは間を置いて

「…では願い事3つ叶えてやる。前の転生した奴は、ヒロインとは幼馴染みとか、イケメンとか、魔法が使えるとかそんな願いだったぞ」

「そんなこと叶えたのかよ?!」

「あぁ。何かおかしいか?」

「いや…人それぞれか」

「…人それぞれじゃ。奴は喜んで転生したからの。でわ改めて何を叶えてほしい?」

特に叶えてほしいことなんてないし別に要らないのにな。

「じゃあ、あんまり原作に関わらないとか、今すぐに桜のバグを取り除くとかは無理か?」

「無理じゃ、お主があまりに長居しすぎたからの。
原作には関わってもらわなくてはいけない。
後、こちらからはバグを取り除くことは無理じゃからな。向こうについてからお主が取り除いてくれ」

「丸投げかよ。仕方ないな…じゃ願い事の保留はありか?」

「欲がないの―。別に大丈夫じゃがそれでいいのか?」

「いいんじゃないの?着いたら速攻バグ取り除くので使うし残り2つもすぐ使うだろ?」

「ヒロインと幼馴染みは今から無理じゃが、イケメ…「別に必要ないし楽しければ良いんじゃないの?」…そうかお主がそこまで言うのなら」

そんながっかりすんなよじいさん。しゃーない。ちょっとバチが当たったって思えばなんとかなるだろう。

「でわ転生してもらうぞ。」

そうじいさんが言うと急に俺の下の床が消えて俺は穴に落ちていった

「こんなの聞いてないぞ!!おい!じじ――――いぃぃぃ……」

「陵、今までありがとう。あっちに行っても頑張れよ。」

穴の方を見ながら小さな声で誰にも聞こえないように言ったそうだ。

「しかし不安じゃ、奴には世話になったし特別に魔法を使えるようにしてやるかの」

神様の小さな気遣いで俺は原作に関わる要素が増えてしまった。

主人公設定

転生前

名前　佐々井（ささい）　陵（りょう）

年齢　１７歳（高校２年）

外見
どこにでもいそうな顔
髪型は黒色で少し長い
目も黒色

性格
基本穏やか
楽しいことには首を突っ込む
転生したからには、第２の人生を楽しもうとしている

転生後

名前　佐々井　陵

年齢　原作前の義之と同じ歳

外見　転生前の容姿を幼くした感じ

性格　転生前とあまり変わらない

特徴　神様の余計なお節介で魔法が使えるようになった。（今はまだ本人も使えることを知らない）

神様に3回願いを叶えてもらえれる

家族　なし（物語が進んだため）

もう一人の転生者
転生後

名前　〇〇〇〇

年齢　原作前の義之と同じ歳

外見　すごくイケメン
誰もが一度は振り返るぐらいの容姿
金色の髪で少しのばしている
目は赤と黒のオッドアイ

性格
原作のヒロインみんなが大好きでむしろ転生できたことを心から喜んでいる
可愛い子みんな大好き
かなりの自己中

特徴
神様の願い事を3つ全部使った
1　あるヒロインとは幼馴染み（家が隣）
2　イケメンに転生（転生前は中より下）
3　魔法が使える（身体能力強化や成績優秀等他にも魔法で頼れる

ことができる範囲は魔法任せ）

しかし魔法はまだ少しの事しか使い慣れていない

家族　あり（父母と3人家族）

始まりを告げる夢のはじまり

～陵ｓｉｄｅ～

はらはらと無数の花びらを散らせる、ひときわ大きな桜の木の根元に…目覚めたばかりの小さな男の子がしゃがみこんでいる中。

運よく？

神様の計らいで俺は初音島にきた。

「いてて、なんだよあのじいさん」

ジェットコースターを遥かに越える奇妙な体験だったため気持ち悪くて吐きそうだ。

「吐きそう…しかも寒い…凍え死にそう…だ？」

ふと、身体に違和感を感じた。普段より目線は低く感じ、身体にも力が入らない。

「俺小さくなってるし…」

転生というものが初体験なためやっぱり実感がわかない。

転生ものの主人公って案外すごいだなと独り納得していた。

しかし転生したからには、受け入れるしかないか…。

頑張れ俺――――

「あの……」

ふとかすれるような声で小さな男の子が俺を声をかけてきた。

「こんばんは」

今度は後ろから誰かが声をかけてきた

～さくらｓｉｄｅ～

雪の積もった白一色の世界に、はらはらと桜の花びらが舞っていた。

音もなく。

驚くほどゆったりと。

まるで周囲を覆い尽くそうとするかのように。

白で塗りつぶされた世界を彩るように。

そんなことを思いながらボクはひときわ大きな桜の樹に近づいていた。

樹齢を重ね、周囲を圧倒するかのように、満開の花を咲かせているその樹の根元に二人の子どもを見つけた。

「こんばんは」

呆然としている二人にボクは話しかけてみた。

「はじめまして。う～ん、と」

二人もいたから驚いていると

「あ…こんばんは」

もう一人の男の子が声をかけてくれた。

ボクがやったことは間違ってるのはわかってるつもり。それでも、ボクは夢を見続けることを選んだ。

「えっと…君は？」

ボクは少し大人びた男の子にそんなことを言っていた。

～陵ｓｉｄｅ～

「えっと…君は？」

まずい。非常にまずい。この人、さくらさんだよな？何て説明すればいいんだ？

『迷子になった』

いや

『正義の魔法使いさ！』

俺はバカか。

…こんな見ず知らずの子どもの言うことなんて信じてくれるわけないよな。

まず俺なら信じないわ。

どうすれば良いかと悩んでいてもらちがあかない。

「俺は陵…転生者…なんだ」

さくらさんに嘘をついても仕方ないし本当のことを言った

「転生者…？」

やっぱり信じていないか。無理もない。ここでバットエンドか…。けど、諦めるな俺…

「信じてもらえないと思うけど、俺は一度ここことは違う世界で死んでここにやってきた。この桜のバグを取り除こうと思って」

さくらさんに俺は何を言ってるんだ？すごく頭が大丈夫か心配されるレベルじゃないか。

…いや。下手をすれば通報されるぞ俺。

自分の言動を今さら後悔する

「どうして君が桜の樹のバグを知っているの?!」

思いもよらない言葉が返ってきた。あれ？突っ込むのそこ？

「…この桜の樹はね『魔法の桜』なんだよ。けど君の言う『バグがある桜の樹』でもあるんだ。願いを叶えるルーチンが不完全で、純粋で、ささやかな願いだけじゃなくて……誰の、どんな願いでも無差別に叶えちゃうの。たとえそれが、どんなに汚れた願いでも…」

さくらさんは俺に真実を語ってくれた。俺のこと信じてくれてるんだよな？

「…俺信じますよ。あなたの言ってること『魔法の桜』のことを」

「…君は本当にこの桜の樹のバグを取り除けれるの？ここにいる義之くんが消えなくて済むようにできるの？」

「はい。転生特典で神様に願ったら取り除けれるみたいです」

俺も実際願いが本当に叶うのか心配だが、あのじいさんにかけてみよう。

…頼むぜじいさん！

俺は大きな桜の樹に近づき両手をあて願った。

『お主は、本当に欲がないの―』

悪かったなじいさん。

けどこれが俺の願いだ。ちゃんと義之を消さないでくれよ。

『わしを誰じゃと思っとる！お主のひとつ目の願い…叶えてやったぞ

！』

…見た感じさっきと変わってないようにしか思えないけど？じいさん本当に大丈夫なのかよ？

「…一応これで大丈夫かな？」

「…嘘みたい。本当にバグがなくなってる！義之くんもちゃんといる！」

本当に大丈夫みたいだ。俺には分からないがじいさんやるじゃんか。

「君のおかけだよ！ほんと感謝しきれないよ」

そう言いながらさくらさんは泣いていた。

「あの…えっと泣かないで下さいよ…。」

「ご、ごめんね、げど、うぇぇ――――ん!!・」

どうしよ。まじで困った。

…さくらさんを慰めるのには何時間もかかった。

この後、すっかり忘れていた義之と合流して俺たちは大きな桜の樹を後にした。

「ありがとう。君のおかげで色々助けてもらって、なにかお礼しなくちゃね」

「いや、別にいいですよ。俺が望んだことなんで」

「そんなわけにはいかないよー。そうだ！君、転生者？だったよね？住む家とかあるの？」

やっぱり信じてなかったんだ。どこら辺を信じたんだろう？さくらさんは…。

「あっ!!」

完全に忘れてた。俺がなかなかこの世界に転生しなかったから話が進んで俺家族いないんだった。

バグ取り除くことだけ考えてきたから何も宛がないや。

「その様子だと住む家ないみたいだね。」

「…はい。」

俺はどうしようか悩んでいると

ぐぅ～。隣で義之のお腹がなっていた。

～さくらｓｉｄｅ～

「寒くない？」

「…寒い」

「お腹は…空いてるよね？」

さっきお腹がなっていたからきっと腹ペコのはず。

なんだか、義之くんが消えずにこのまま生きてるって思ったら思わず笑みがこぼれていた。

「じゃあ、二人とも暖かくてご飯の食べられるところに行こっか」

「…うん」

「そうだ！自己紹介がまだだったね。えっとね、ボクはさくら。芳乃さくら。二人ともよろしくね」

「ぼくは…」

「さくらいよしゆき。君の名前だよ」

「え、えっと……」

「よろしくお願いしますね、さくらさん、よしゆき。改めて、ぼくはさいりょうっていいます！」

さっき出会った、義之くんと同じ歳の彼――陵君はさっきまでの言葉遣いとは違っていた。

「どうして敬語なの？」

「いや…今思えば転生してきて小さくなったのにさっきみたいな言葉遣いじゃ、他の人に変に思われそうじゃないですか？」

ボクはさっきのままで良かったのに彼は気にしてるみたい。

「ボクの前では普通にしてほしいな～なんだか他人行儀すぎて嫌だな～」

「そんなこと言っても…」

陵君が困ってるみたい。なんだか面白い子だな～。

「あの―よ…ょし…」

どうしたんだろ？義之くんがなんだか言い淀んでる。

「どうしたんだよ？よしゆき、それと、芳乃さんじゃなくて、さくらさんだろ？」

できれば名前を呼んでほしかったけれど、いきなりは無理だよね。

「恥ずかしがるなよ。ほら、さくらさん、って」

「さ、さくらさん…よろしく…りょうくんも…」

最後の方はかすれるくらいだったけど義之くんはボクの名前を呼んでくれた。

「よろしくね♪じゃあ、そろそろ行こっか♪義之くん、陵くん」

ボクはとても嬉しかった。

義之くんが存在し、桜のバグも取り除けて、これ以上にないくらいボクは幸せだ。

ボクはその温もりを何度も確認するかのように二人の小さな手を握り歩を進めた。

はじまりを迎える新しい家族

「今日からここが君たちのお家だよ」

さくらさんが案内してくれた一軒家…たしか『朝倉家』だよな？

「ここが？」

「うん。ボクのお兄ちゃんの家なんだけどね」

「みんないい人だよ」

———ピンポーン

さくらさんがインターホンを押すと、家の中から誰かの足音が聞こえてきた。

ドアが開き小さな女の子が俺たちを見ていた。

「……」

由夢だよな？たぶん？

…その子は、俺と義之を興味津々にじっと見つめてきている。

「……」

義之は女の子の行動に困ってるみたいだった。

「じー」

「……え、あ、えっと」

「じーーーーー」

「あ、あの」

「じーーーーーー」

「り、りょうくん…さ、さくらさん？」

もう少し見ていたかったがさすがに困った義之が俺とさくらさんに救いを求めてきた

さくらさんは、というと楽しそうに微笑んでいた。

「にゃはは、こんばんは由夢ちゃん」

「こんばんは」

…やっぱり由夢みたいだ。

そこはかとなく似てるわ～…あ、本人か。

「この子が義之くん。この前話した子ね。そしてこの子は、陵くんだよ」

さくらさんが俺と義之のことを女の子に紹介してくれた

「音姫ちゃんもおいで」

さくらさんがドアの奥の方に向かって声をかけていたら音姉？だよな？が出てきた。

「……」

あれ？どうしたんだろ？いつも明るい音姉とは違ってなんだか不機嫌そうだ。

「ほら、ゆめ。ちゃんと外にでて」

「はーい」

ひょこひょこと出てくるふたりの女の子。俺たちの前に並ぶ。

二人の視線を間近に感じながら、義之は困り果てていて、さくらさんは、いたずらっぽい笑みで見ている

「じゃあ、ボクはお兄ちゃんに話があるから。後は適当にやってね。４人とも仲良くするんだよ―♪」

…さくらさんは俺たちをおいて家の中に入っていった。

さっきからじっと注がれる二人の視線。…俺から自己紹介するか。

「お…ぼくは、ささいりょう。よろしく」

さすがに前まで『俺』だったのに対し『僕』にかえたのは、違和感がありとても恥ずかしい。

「えっと、さくらいよしゆきです。よろしくね」

ぺこりと頭を下げながら、右手を差し出す。

しかし、その手に触れるものはなく、ぶらぶらと宙に浮いた状態だ。

「あ、あははは」

義之どんまい。外してしまって少しかわいそうに思えた。

「ゆめ」

困って戻そうとしていた義之の手が、ぎゅっと由夢の手に包み込まれていた。

「へ？」

「あさくらゆめ」

そう言いながら、由夢はにーっと笑っていた。

「あーっと、名前？」

…義之よ？どこからどう考えても名前じゃないか？

「うん」

「そっか、ゆめって言うんだ」

「そう。よろしくね……お…」

「「お？」」

俺と義之の声が重なった。

「お……おにいちゃん」

頬を赤らめながら、そんなことを言う。きっと、俺も頬が赤いと思う。

『おにいちゃん』なんて転生前では、言われたことがなかったからなんだか嬉しかった。

「おとめ」

ポツリと一言。

一言言い終わるとすでに背中を向けて家に入っていた。

「ぼくたち、めいわくだった？」

俺は、そう言いながら音姉に嫌われることしたのかな？と悩んだ。

「んー、そんなことないよ。おねえちゃん、さいきん怒ってばっかりだから。気にしなくていいと思うよ」

「おじいちゃんも、お母さんもだいかんげいって言ってたもん」

「わ、わたしもいやじゃないし。おにいちゃんがおにいちゃんになるの」

俺たちが原因って訳じゃないみたいで安心した。けど、音姉がムスッとしてるのには気になる。

「由夢ちゃん、ありがと」

「そ、それよりも、はやく中に入ろう？かぜひいちゃうよ」

なんだか、今はこの優しさが身にしみる。俺、凍え死なずに済んだよ。

そう思いながら由夢に引っ張られながら玄関をくぐる。

「えっと…おじゃまします」

「おじゃまします」

「ちがうよ。ただいまだよ」

そうか…これから俺たちの家になるってさくらさん言ってたもんな。

「ん？」

そうも分からずに義之の頭には？マークがいっぱいだ。

「だから、ただいま、だよ。今日からおにいちゃんたちのおうちだもん」

そしてこの日。俺と義之は、朝倉家の一員となった。

由夢と義之とのかくれんぼ

～陵ｓｉｄｅ～

今日も義之と由夢と3人で遊んでいる。音姉はというと、俺らとは遊びたくないだそうだ。

まぁ…仕方ないか。

それにしても、朝倉家に住みはじめてから結構経った。

この島での生活といえば、毎日3人で遊ぶこと。たまに、小恋とも遊ぶ。子どもの遊びって懐かしくて、なかなか楽しいもんだ。

だからといって初めは抵抗があった。転生前は、高校生だったから恥ずかしすぎてよく逃げていた。

いつからか吹っ切れて今のように今日はあの大きな桜の樹の近くで遊んでいる。

バグは取り除けたみたいだが、桜の樹は当分咲いたままらしい。一年中、桜の樹が咲いた島。

『初音島』のこの景色をまだ見ていられるなんて嬉しいかぎりだ。

「りょうくーん、今日はかくれんぼで遊ぶよ。鬼はりょうくんだよ」

勝手に話が進んでいたみたいで俺が鬼…だそうだ。

「お兄ちゃん、１０００まで数えたらさがしてね」

１０００？数えすぎじゃね？

「せめて５００じゃだめか？」

「ダメだよ。きちんと１０００までかぞえなきゃ。お兄ちゃん、ズルしちゃダメだよ」

…くそ、バレてる。１０００なんて誤魔化せると思ったが侮れないな。

「わかったよ…けど、あんまり遠くまで隠れるなよ。さがすの大変だからさ」

「「はーい」」

２人は返事をしながら隠れに行った。

…今日も桜がきれいだな

そんなことを思いながら

きちんと１０００まで数えはじめた。

「……９９７、９９８、９９９、１０００っと！」

さて２人はどこに隠れたのだろう？２人が一緒に隠れていれば楽だな…っと思いながらゆっくりと歩き出した。

……。

自分では隠れているつもりなのだろう。義之がいた。

鬼の俺がいっちゃなんだが、もう少しうまく隠れろよ。

大きな看板の後ろに隠れている義之の足が見えていた。

…普通に見つけても面白くないし、脅かしてやるか。笑

そう俺は考えながら気づいてなかったように看板を素通りし、こっそり背後から義之に近づいた。

「やった～、ぼくに気づかずりょうくん向こうに行った!!」

「そうみたいだな。これでひと安心だな」

「うん。そうだ…ね？って、りょうくん?!」

「義之みっけ。」

「えー？何でわかったの？」

「勘だ勘。いるかな？って思って覗いたら隠れていただけだ」

本音を言ったら傷つくだろうし、次はもっと複雑なところ隠れられても俺が困るからな。

「今日はうまく隠れたでしょ？」

「おう。今日はさがすの難しかったわ」

「なら良かった♪」

なんだか喜んでいるみたいだし、よしとしよう。

「後は、由夢ちゃんだな」

こちらは義之とは違って器用に隠れているだろうな。あぁ～見つけられるかな…。

～由夢ｓｉｄｅ～

今はお兄ちゃん達とかくれんぼをしている。

わたしは、見つからないようにどこに隠れようか悩んでいた。

「ん～早くしないとお兄ちゃんが見つけにくるー」

早いとこ隠れなくちゃ慌てていた。

「…そうだ！お兄ちゃんが一度隠れていたあの場所にしよ！っと」

そう思いながらわたしはもう一度、走ってきた道に戻った。

「ここなら見つからないよね」

わたしは枚散る桜を見ながら、お兄ちゃんが見つけてくれるのを待っていた。

…けどお兄ちゃんはなかなか来ない。来る気配すらない。

忘れられたのかな？それとも意地悪なのかな？そんな不安が大きくなり、わたしは泣いてしまった。

～陵ｓｉｄｅ～

日はおちてきて暗くなってきた

しかし、帰るわけにはいかない。まだ、由夢を見つけていないのだ。

「りょうくん。そろそろ帰らないと…」

「そうだよな。義之、先帰っていてくれないか？」

「えっ？ぼくも一緒にさがすよ」

「いや。もうすぐしたら今よりもっと暗くなる。僕もすぐ由夢ちゃんをさがして連れて帰るから」

「…うん。わかったよ。じゃあ先帰ってるね」

「おう。」

…しかし、由夢はどこに隠れているんだ？さっきから全然見つからない。

「おーい、由夢！そろそろ帰ろうぜ、出てきてくれよ」

…返事が帰ってこない。本当どこに行ったんだ？

俺は由夢を、走りながら必死にさがした。

…するとどこからか、誰かの泣いている声が聞こえてきた。聞き覚えのある声だ…間違いない。

もしかしてと思い俺はさっきより速く走ってその場所に急いだ。

「…やっとみつけた」

走ってきたから少し息を整える。まさか…木上に隠れてるとはな。俺のマネでもしたのか？

「由夢ちゃーん、暗くなってきたし帰ろ！」

「おにいぢやーん、おぞいよー」

「ほんと、ごめん！だからほら！」

俺は両手を差し出す。

「…おりれないんだよーー」

おいおい。まじかよ。それでよく上れたな。

「大丈夫！ちゃんと受け止めてやるから！ほら！」

俺も少しテンパってた。俺こんなに小さいけど受け止められるのだろうか？下手したらどっちも怪我するんじゃないだろうか？

「むりだよー」

「そんなことない。兄ちゃんを信じろ！」

やるしかないんだ。由夢が怪我をしないようにすれば大丈夫だ。

「…うん…えい！」

俺の思いが通じたのか俺にめがけて由夢が飛び降りた。

「由夢ちゃん…大丈夫？」

「…うん。たぶん…」

……良かった怪我はしてないみたいだ。

「…お兄ちゃんは？」

「だ、大丈夫…」

少し身体が痛いが気にするな。うん、気のせいだ。

俺と由夢は立ち上がり服についていた桜の花びらを払った。

「じゃあ、帰るとするか」

辺りは真っ暗になり街灯がつきだした。

「お兄ちゃん、おじいちゃん達に怒られちゃうね…」

「怒られたら、怒られたで仕方ないさ。こんな時間まで遊んでたからな」

「そうだけど…」

「原因は、僕だし。由夢ちゃんは大丈夫だよ」

一応俺なりに元気付けたつもりだ。実際かくれんぼを甘くみていた俺が悪い。

「そんなことないよ。ゆめが悪いのに…」

「あぁーもう、しゃーない。じゃあ、2人で怒られるか」

諦めるしかないよな、怒られるの確定だし。

「そうだね。じゃあ…行こっか」

由夢も開き直ったのか、さっきに比べて吹っ切れている感じだ。

俺たちは家に帰ると案の定、純一さん達に怒られた。義之が説明をしていてくれたから、少しだけ短い説教となった。

「ありがと、お兄ちゃん」

「ん？どうした？」

「ううん。何でもない！」

こうして1日は終わった

もう一人の転生者

～○○ｓｉｄｅ～

「ゆうじく～ん」

俺の名前は、高橋雄二。

今の父さんと母さんがつけてくれた名前だ。

どうして俺が『今の』っていうかって？

それは…俺は一度別とは違う世界で死んで転生してきた『転生者』だからだ。

この『Ｄ．Ｃ．Ⅱ』の世界に転生できるなんて夢にも思わなかった。神様って本当にいるんだなって感謝したさ。

転生してからは、かなりの月日が経って、今は幼馴染みの女の子と遊んでいる。

今さっき俺の名前を呼んだ女の子。それは、俺が一番大好きなヒロイン『白河ななか』だ。

ななかとは、俺の親とななかの親が仲が良く、家も隣同士で生まれた時から、今までほとんど一緒にいる。

幼馴染みって響きに俺憧れていたんだよな～。

この『幼馴染み』という特典は、神様が転生する前に願いを3つ叶えた時のひとつだ。

俺の3つ願い事は

1つ目は、ななかと幼馴染みになれるように願ったこと。本当は、ななかと恋人になりたかったけど…それは、俺のプライドが許さない。

どうしてって？それは…

ななかも好きだが、他にも音姉や由夢、それに小恋に杏に茜…原作に出てくる女の子。みんな大好きな俺は、難しいが『ハーレム』を狙っている。

2つ目は、ハーレムを目指すにはやっぱりイケメンだろ？

たとえヒロインが可愛くても俺がブサイクだとそのヒロインの子に申し訳ない。

美男美女…最高の響きじゃないか？

3つ目は、魔法が使えること。

魔法っていっても今は、運動神経が良いことにしか使っていない。（魔法について詳しく知らない）

もっと便利に扱えるようになりたいのにな。

これも少しでもヒロイン達の注目を集めるために考えたことだ。

やっぱりこの世界に来たからには、俺に有利な方向に持っていくしかないよな。

そんなことを考えていると

「ちょっ～と、待ってよ～！」

俺のヒロインが息を切らしながら来てくれた。

「ごめん、ごめん。これでも手加減したつもりなんだけどな？」

「ゆうじくん、とても速いから、ぜんぜん勝てないよ～」

家から大きな桜の樹まで追いかけっこをしていた。手は抜いたつもりだが調節が難しいな。

「本当、ごめんって」

「ぜ―たいに、許さないんだからね！」

そんなフグみたいに頬を膨らましてぷんぷんするなよ？可愛い顔が台無しじゃんか。

それでも可愛いな、ななか♪

「そんな怒るなよ～」

「いいもん！今度ぜったいに負けないからね！」

「おう！じゃあ次は何して遊ぶ？」

そんな感じでいつも仲良しな俺達だ。絶対ななかは、俺のこと好きなはず。間違いないだろう。

「だめだよ～今日は小恋ちゃんと小恋ちゃんのともだちと遊ぶやくそくしてたじゃない！待たなくちゃ！」

「あ、そうだった…確かもうすぐだよな？」

「そのはずなんだけど…あっ！小恋ちゃんだ～！」

そんな会話をしていると小さな女の子と男の子が慌てながらこっちに来た。

「遅れてごめんね。まったよね？よしゆきが遅いからだよ」

「だって、今日遊ぶなんて約束してなかったじゃん…」

「驚かそうと思って…黙ってたんだよ…」

「へへっ。二人ともまってないよ～。私たち今来たところだよ～」

…こいつが義之か。俺がハーレムを目指すにはかなり邪魔だが…こいつになんかには負けねー。

「はじめまして～♪私は、白河ななかっていうのよろしくね」

「…はじめまして。ぼくは、たかはしゆうじ。よろしくね」

俺は仕方なく挨拶をした。

「ぼくは、さくらいよしゆき。よろしくね」

「本当はね、もう一人つれてくるつもりだったけど、風邪でこれなくなっちゃたんだ…」

「そうなの小恋ちゃん？じゃあ、その子にお大事にねって伝えておいてね」

「うん、わかったー。伝えとくよ」

ふーん風邪か。この流れだと由夢かな？大丈夫かな？

「そうなんだ…。僕からもお大事にって言っといてね」

あぁ～小さい頃の由夢ちゃんかー、見たかったなー。俺ついてないわ。

「じゃあ、４人で今から遊ぼっか？」

そうななかが言うと俺たちは日が暮れるまで遊んだ。

かくれんぼやおにごっこ。子どものする遊びを遊び尽くした。一応魔法で体力には自信あるが、疲れるもんは疲れるな。

そうして今日も１日は終わった。

～陵ｓｉｄｅ～

俺は今、風邪でふとんに寝込んでいる。義之は小恋に遊ぼうと誘われて家から出ていった。

「はぁ～たまには家でのんびりも良いっか」

毎日義之と由夢と遊んで疲れがたまったのか？

俺って体力ないのかな？

「お兄ちゃんだいじょうぶ？」

俺を心配してか、由夢がドアの方で覗いていた。

「由夢ちゃんか。入ってきちゃダメだよ。風邪うつるかもしれないから」

「…だってひまだもん。お姉ちゃんは、今日もなんだか怒っているし、よしゆきお兄ちゃんは遊びに行っちゃったし」

「それでもダメだよ…ってこら！」

俺がいってる間に由夢が部屋に入ってきた。

「だいじょうぶだよ。ゆめ、お兄ちゃんよりつよいもん。」

…義之め、由夢が風邪になったらあいつのせいだからな。

「でも、僕、風邪だし遊べないよ？」

「いいよー、一人でいるのがさみしいから一緒にいるの」

「…？」

「そうだ！お医者さんごっこしよ。お兄ちゃんは寝てるだけでいい

よ」

「って、遊ぶのかよ」

「だから、お兄ちゃんは寝ているだけでいいんだよ」

とか言いながら結局、家で遊んだ。どこにあったか知らないが、聴診器を持ってきて由夢のいう、お医者さんごっこをした。

まぁ、本当に寝ているだけだったから遊んだ？に入るのか？

夕方になると、義之は家に帰ってきた。俺が風邪だと今日遊んだ友達に言ったら『お大事に』って伝えてくれと言われたらしい。

誰だろ？きっと、優しい子なんだな…。

そんな感じで今日1日終わろうとして…いなかった。

夜中に誰かが俺の部屋に入ってきた。

「…お兄ちゃん」

昼に続き…由夢だった。

いつもは4人で寝ている。しかし今日は、俺が風邪のため1人別の部屋で寝ていた。

「こわい夢をみちゃって…一緒に寝ていい？」

普段なら別に良いが、今回はダメだ。これ以上一緒にいたら確実に由夢は風邪になるだろう。
…っておい。すでに布団に潜り込んでいた。
「由夢ちゃん…僕、風邪なんだけど…」
由夢は体が冷えていたのか布団が少し冷たくなった
「だってね。お姉ちゃんも、よしゆきお兄ちゃんもぐっすり寝ているもん…お兄ちゃんなら起きてるかな？って思ってきちゃった」
…きちゃったって。
俺は今日1日布団で寝ていたから寝れないでいた。
「…風邪になっても知らないぞ」
「お兄ちゃん今日そればっかり。」
「はぁ～。…ってかどんな怖い夢を見たんだ？」
「わかんない…でもね、とってもこわい夢だったの。またさっきと同じ夢見そうでこわいの…」
「わかんないって…しゃーない。今日だけだぞ」
「ありがと。なんかね、お兄ちゃんと一緒に寝たらこわい夢見ないような気がするの」
「僕がいても、もしかすると怖い夢みるかもよ？」
「そんなことない！おにいちゃんがいるから、だいじょうぶ！」

どうしてそんなに言いきれるんだ?まったく、不思議なやつだな。
「ほら!さっさと寝よ?寝坊したらお姉ちゃんに怒られるよ?」

「そうだね。じゃあ、寝よっか」
少し時間が経ったら由夢は寝ていた。良かった、大丈夫そうじゃん。

「…お兄ちゃん、だい…きだよ…すぅ…すぅ…」

…?寝言か。
きっと夢の中でも遊んでそうだな。

…次の日、由夢は昨日俺と一緒にいたから風邪になった。

あれだけ注意したのに聞かない由夢が悪いと思いながらも、自分の風邪がうつった罪悪感で1日中、看病をした。

小さな魔法～あの人との再会～

～陵ｓｉｄｅ～

「りょうくん、あそぼうよ！」

今日も、毎日のように遊ぼうと言ってくる義之が話しかけてきた。

「…いやだ」

「そんなこと言わないでさ、今日は何して遊ぶ？」

…こいつは。聞き分けのないのは毎日のこと。こういうやり取りはいつものこと。

そろそろ飽きないのかよ？さすがに日常茶飯事すぎるだろ。

「今日は、遊びたくない。僕じゃなく、小恋や由夢と遊べば良いじゃないか？」

今回はいつもより粘ってみた。

「りょうくんどうしたの？僕、りょうくんになにか悪いことした？」

「1日ぐらい遊ばなくてもちゃんと生きていけるからさー、今日ぐら良いだろ？」

「そんなこと言わないでさ…そうだ！」

義之は何を閃いたのか、何やらモゾモゾとしている。…トイレか？いやそれはないか。

「えい！…んー、やっぱりおじいちゃんみたいに上手く出来ないや」

そう言いながら見せてくれたのはイビツな形をした…奇妙なものだった。

「これね、おじいちゃんが教えてくれたんだー、りょうくんに見せたくて練習したんだけど…もっと練習しておくね」

そう言いながら奇妙なものをパクっと食べた。あれってたしか義之の特技？みたいなやつだったよな？てか腹壊さないのか？

「うげっ、おいしくないや」

「…義之？さっきのどうやったの？」

身近で手から和菓子を出したらやっぱり驚くわ。素直に今の疑問をぶつけてみた。

「気になる？遊んでくれたら教えるよー！」

…なんだよそれ。俺もしかして嵌められた？やられたー、けど知りたい。

「…べつに。そんなこと…」

「気になるんだよね？だったら今日は鬼ごっこで遊ぼー！」

…義之め。くそー。

…俺は結局いつものように遊んだ。

「じゃあ、もう一回いくよ……えい！」

家に帰ってきてからは部屋に入って今は、義之の『魔法』を見ている。

さっき出して貰った和菓子？のような食べ物は少しずつ形がまともになってきていた。

「それ食べていい？なんか旨そうにできてるし」

「うん、いいよ。あげるー」

そう言いながら俺は義之の手にある和菓子をもらうと一口で食べた。

…見た目は綺麗だったがやっぱり味が…。

「どう？美味しい？」

…変な味だ……そんな目で見ないでくれ。不味いって言えねー。

「う、旨いぞ…。練習したかいがあったな」

「ほんとう？……良かったーりょうくんのことだから美味しくないって言うと思ってたよ」

鋭いな義之、大丈夫だ。心の中では思ったからさ。

「ぼくも食べてみたかったけど、なんかもう出せなくなっちゃった」

そんなことを言っていると、義之のお腹がなった。

「和菓子を出すのに、お前の身体のカロリーを使うんじゃないか？」

「…？カロリーてなに？」

「…んんっと。簡単に言うと、義之が食べたものを使って和菓子を出してるって…分かるか？」

「…あんまり」

俺説明苦手だからな…。どうしたら伝わるんだ？

「たぶん、ご飯を食べた後にまた和菓子出す練習してみ。そしたら使えると思うから」

「…うん。わかった」

返事が終わる頃、晩御飯の準備ができたみたいだ。

俺らは急いでご飯を食べまた部屋に戻った。

「義之、さっきのように魔法使ってみて」

「うん……えい！わっ！和菓子でたよ、りょうくん！」

「そうだな、でっさっきの意味わかってくれた？」

「うん！何となく分かったよ」

…ならいいが。けど手から和菓子だせれるって良いよな。俺も出してみたいわ。

そんなことがあった日だった…そして今日は、もう寝る時間になった。

…3人はすでに寝ている。あぁ～。寝るの早すぎ。…違うか、俺が遅いだけか。

寝れない俺は、眠たくなるように試行錯誤しながら今日のことを考えていた。

魔法…一度は使ってみたいものだな。なんか欲が出てきたか俺？

ちょっとした真似事で義之のように手から和菓子が出るようなイメージをしてみた。

……はは。まさかな。手に違和感を感じた。なんだよこれ？

俺は信じられなかった。そっと手をひらけると、そこに和菓子があった。

「まじかよ…」

その一言がさらっと出てきた。

まさか、義之のように和菓子が出せるなんて？どうしてだ？

この世界にきて、魔法が使えるようになったのか？

なんだかモヤモヤする。自分の身体なのに自分の身体じゃないような感じた。

どう言うことだ？すると次の瞬間意識が遠くなった……

目を開けるとそこには、懐かしいあの人が俺の前にたっていた。

「お主、『魔法』に気づくの遅すぎじゃ…」

「…じいさん?!はぁ？どういうことだよ魔法って？」

久しぶりに会ったじいさん…神様に会った。俺がこの世界に、転生させた張本人。

「久しぶりじゃの～、元気にしていた？…まあ、聞かなくてもわかるがの～お主の口から聞きたいぞ」

「……まあ、元気にやってるよ」

「ほほっ、なら良かったわい」

久しぶりの再開。嬉しいような、ムカつくような…。

「そうだ、じいさん!?なんだよ、あの気持ち悪い転生のしかた!?危うく吐くところだったし!!」

そうこれは、言っておかなくちゃいけないことだ。転生して吐くなんて出だし悪くなるとこだったわ。

「…なんじゃ、そんなことか?慣れれば大丈夫じゃよ」

「……あんな気持ち悪いの慣れる何てむりだろ。今すぐ他に転生するやつらとかのために止めさせるべきだ！」

俺みたいに、あんな思い他の人も体験したと考えるとなんだかゾッとした。

「なんじゃー、その言い方わ?…仕方ないのー少しは考えてみるわい」

…さすがじいさん…ってこんな話するためにこの空間にいるんだったけ?

「おー、忘れておったわい。お主の『魔法』について話がしたくてこっちに呼んだんじゃ」

「……そうだ。じいさん、俺の身体っておかしくなったのか?」

今の状態に不安があった。魔法?少しは願ったさ。義之みたいに使ってみたいって。

「それは、違うぞ。その能力はわしがお主に与えたものじゃ」

「はあ？俺の保留にしていた３つの願いのひとつか？」

「少し違うの、それは特別サービスじゃ。お主には転生する前、世話になったからの。餞別じゃ。」

…なんだよそれ。不安になって損した感じだ。けど、貰ったものはありがたく貰っておくか。

「気づくまで内緒にしておいたのにのー、待ち惚けておったぞ！」

「……知らねよ。旅立つ前に言ってくれよ。…けど。まぁ、ありがとう…」

「なんじゃい。むず痒いのー」

「じいさん、ありがたく使わせてもらうよ」

「お主の『魔法』だからの。いろんな風に使えるが、使い間違えるんじゃないぞ…まぁ、お主ならそんなことはないか…」

…信用してんのか？もし使い間違えたらどうすんだよ。そうならないように、魔法の特訓しないとな。

「…もう、タイムリミットか。」

じいさんがそんなことを言った瞬間俺の身体が透けていた。

「D．C．Ⅱの世界に戻るだけじゃ、そう驚くな」

「また、あの奇妙な体験するのか？」

寒気がした。想像しただけでも吐き気がした。

「お主はヘタレじゃのー、心配せんでも、夢が覚めるだけじゃ。」
…良かった。てかヘタレじゃないし。じいさんは、体験したことないからそんなこと言えるんだよ。
「ほら、もうすぐしたら覚めるぞ」
「おう。じゃあ…またな」
次また会えるか分からない。けど、口からそんな言葉が出ていた。元気にやれよじいさん。

…次の瞬間目が覚めた。…よくみる部屋。時間は6時、早く起きすぎだろ。
けど、二度寝は出来ないか。身体を起こし手のひらに力を込めた。
…俺はその日『魔法』を手に入れた。今は、和菓子を出すことにしか使えないがこの小さな『魔法』を大事に使おうと決心した。

そんな陵のある日の日常

始まりのマホウ

～ななかｓｉｄｅ～

「ゆうじく～ん、学校行こー」

私の名前は、白河ななか。今から学校に行くところ。毎朝、雄二くんを迎えに行って一緒に登校しているの。

「わりー、ちょっと手間取ってて先行っててくれ」

「…わかったーじゃあ先行くね」

いつもは、一緒に登校するんだけど今日はどうしたのかな？

そう思いながら私は一人桜並木を通りながら考えていた。学校いくのは…実話言うと不安なんだ。

なぜかと言うと…

「ちょっと？白河さん今日高橋くんどうしたの？」

するとそこに、５人の女の子がいた。やっぱり…。いやだなー、今日１日ついてないかも…。

「なんかね、朝迎えに行くとバタバタしてたみたいで、先に行ってってなったのー」

「……じゃあこの際だから言わせてもらうけど…あんた何様？幼馴染みかなんか知らないけどさ？私たちの『雄二様』に近づきすぎよ！」

私と雄二くんの仲を嫌っていていつもは影で言われているけど、今日は雄二くんがいないから面と向かって言われた。

私と雄二くんは家が近いからいつも一緒にいることが多い。けど、私と雄二くんとは『幼馴染み』ってだけで、みんなが思っているような関係じゃないのに…。

「そーよ！ちょっと家が近いだけで昔から仲が良いだけなくせに」

「ちょっと可愛いからって調子乗らないでよ！」

口々に文句を言われた。私調子なんか乗ってないし…。

そら、雄二くんはカッコイイよ。頭も良くて、運動神経も良くってさ神様は不公平すぎるんだよー。

そんな子がモテないわけないよ。

「雄二さまにこれ以上近づいた…「おはようーみんな！」…わかったわね？」

ら、を言い終わる前に雄二くんがみんなに挨拶をしながら教室に入ってきた。

教室へ入るなり、私のところに来て

「ななか、ごめんな。今日寝坊しちゃってさ」

これ以上近づくなって言われたばっかりなのに…どちらかと言うと雄二くんが引っ付いてくるんだけど…。

さっきのファンの子達は私をにらんでいた。視線をかなり感じる。今日1日ブルーだ…。

どうして私がとやかく言われないといけないのか、なにも悪いことしていないのに…。

人の思っていることが知れたら良いのになー。

そんなことを思いながら、授業はいつのまにか終わり放課後になっていた。

「ななかー、一緒に帰ろうぜ」

雄二くんが、声をかけてきてくれた。けど、朝にあんなことがあったしな…。

「ごめんね、雄二くん。今日は少しよるとこがあって…」

「ん？どこによるんだ？俺がついて行ってやろうか？」

「うんん。一人で大丈夫だから～」

明るく振る舞ってみた。顔引きっていないかな？

「…そうかー。分かったわ。じゃあまた明日な？」

「ごめんね、また明日ー」

雄二くんは少し残念そうな顔をしながら教室を出ていった。

……んんー。どうしよ、今帰ったら雄二くんと会いそうだし少し学校に残るしかないっか。

学校に30分ぐらい残ってて一人下校をした。

「ねー?あの噂知ってる?何でも願いが叶う、桜の樹。一番大きく目立ってるあの桜の樹ー」

「知ってるけどさーあれって迷信みたいなもんでしょ?」

「そんなことないって、噂によるとあの樹に願って実際に叶った人がいるんだって!」

「なにそれーってどんな願いが叶ったの?」

「えっとー大学合格とかさ、彼氏がほしいとかー」

「どれも、その人の努力じゃないのー?願いが叶う樹なんてあるわけないじゃん!」

「そうなのかな〜…てかさてかさ…」

そんなやり取りを聞いた。何でも叶う桜の樹?あの樹が願いを叶えてくれるの?

はじめて聞いたよ、そんな話。でも、本当に叶うのかな?けど叶うのだったら…私のお願いを聞いてほしい。そんな思いでいっぱいだった。

ひときわ目立つ大きな桜の樹に、私は願った。

人の気持ちが知れるようになりたい！みんなが考えてることが分かるようになりたい！

そんな願い事をした。って叶うわけないよね…あはは。

桜の樹を後にした私は家に帰った。普段と変わらない生活。そうだよねー叶うわけないっか。

次の日の朝。

今日も学校…雄二くんと学校いかなきゃ。急に誘わなくなったら怪しまれるし、今は仕方ないよね。

ピンポーン――――ー

インターホンをならす。するとドアが開いた。

「おはよう、ななか今日は一緒に学校に行こうか」

昨日みたいにドタバタしてたらなーっとうまくいかないっかと残念だった。

『今日もななか可愛いーまじ昨日寝坊した俺バカじゃん！徹ゲーはやっぱり次の日くるわー』

……？なにさっきの感じ？雄二くんの声？

「ん？どしたんだ、ななか？」

さっき手が少し触れた時かな？なにか聞こえたような？

「雄二くん？昨日ゲームして、夜更かししたんだよ…ね？」

「そーなんだよ…あれ？俺、ななかに話したっけ？」

……当たってる。もしかして人の思ってることが本当に分かるようになったのかな？

「……え？その…クラスの子と話してたの聞いただけだよーなんのゲームか気になってさ～」

「なーんだ、聞いてたのかよー、新しいゲームかってさ……」

後の話なんて覚えていない。願いが叶って手に入れた自分の力について考えていた。

これで、人の思ってることが分かる。

これで、苛められなく済むのかな？

この人の心を読める力を使ってその人に合わせていこう。そうしたら、私はきっと幸せになれるかな？

～雄二ｓｉｄｅ～

俺が遅刻した次の日からななかの様子が変だ。別に悪い意味じゃなく良い意味で。

最近は俺とあまり絡むこともなくクラスの友達や男女みんなと仲が良い。

なんか俺から離れていったみたいで嫌な感じだ。

……てかあれ？俺なんか大事なこと忘れてないか？ななかって……？あっ。

ヤバイヤバイヤバイ!!
ヤバイヤバイヤバイ!!!

ななかってもしかして人の心が読める能力を手に入れたんじゃないか？

何で忘れてんだよ俺ー!!

もしかして俺の考えてること筒抜けだったんじゃないか？

…非常にやばいし、俺が転生者のことやハーレム狙ってることがバレたんじゃないか？

落ち着け自分。よーく考えろ。今まで転生者のことやハーレムのことなんて考えてなかったしな。そうだよ、読まれてるなんてないか……？

…あれ？誰か俺の手握ってないか？

～ななかｓｉｄｅ～

さっきから雄二くんがなにか顔がコロコロ変わってる。顔色悪そうだし、何かあったのかな？

そう思い、私は雄二くんに近づいて雄二くんの手を握ってみた。

『…非常にやばいし、俺が転生者のことやハーレム狙ってることがバレたんじゃないか？

落ち着け自分。よーく考えろ。今まで転生者のことやハーレムのことなんて考えてなかったしな。そうだよ、読まれてるなんてないか……？』

雄二くんが私が触っている手を見ている。

「うわ?!ななかどうしたんだよ、脅かすなって！」

勢いよく手がほどかれた。雄二くん私の能力知っているのかな？……そんなはずないっか♪

けど、さっきの『転生者』、『ハーレム』ってどういうことなんだろ？

何かのゲームのことかな？

「雄二くんさっきから、顔色悪かったから心配になって……大丈夫？」

どうしたんだろ…さっきよりも顔色が悪く見える。

「へ？あぁー、そんなことない…よ。うん……」

「保健室行く？なんか今日変だよ？」

「……えーいや、そーだな？俺今日体調悪いから帰るわ…」

「えっ？そうなの？」

「……わりー、先生に帰るって言っといてくれななか」

そう言い終わると雄二くんはランドセルに教科書を積めて教室を出ていった。

～雄二ｓｉｄｅ～

「何してんだよ俺…」

家に帰る途中、さっきのことを考えていた。

確実に読まれたよな？いや、読まれていない…。ななかだから読んでないと信じよう。

俺は開き直るしかなかった。

ななか対策に心読まれないようにするしかないよな？今日は早めに帰って対策を練ろう。

それしかないだろ。こんなのバレたら俺、ここにきた意味ないじゃん。

魔法を使えばなんとかなるだろ。やるぞ俺ー!!

その日雄二は、ななか対策を考えた。じぶんでも完璧な魔法の対策だと思っていた。

……のはずだったが。実は、すべて読まれている雄二だった。

一心同体～もう一人の理解者～

～陵ｓｉｄｅ～

俺は今走っている。それは…ある人を探してるからだ。

あっちは探したし…残るわ…。そんなこと思いながら俺は走っていた。

季節は冬。寒空の下、今日はいつもより、桜の花びらが吹き荒れていた。

「いた…」

片隅のベンチに、俺が捜していた人……固い表情をした女の子が座っていた。

俺はその女の子…音姉に近づきながら

「……お姉ちゃん？こんなところで何してんの？」

「……」

って無視ですか？俺地味に気づついたんだが……。

音姉は俺の言葉には反応しないでまったく顔を上げようとしない。うつむいたまんま背中を丸めている。

視線は、地面をじっと見つめたまんまだ。

「ねぇ、お姉ちゃん。僕の声聞こえてないの？」

「……聞こえてるよ」

……なんなら返事してくれよ。心の中で泣いた。がちで…。

「あっ、良かったー。やっと返事してくれた」

「ねー、僕と義之と由夢ちゃんでの４人で一緒に遊ぼ！」

いつもは、誘わない自分だが今日は思いきって誘ってみた。

「……由夢はともかく、どうして私が、あなた達と遊ばなきゃいけないの？」

あなた達？俺と義之の事だよな？音姉から冷たい視線が突き刺さる。

「え…いや、どうしてって。僕がお姉ちゃんと遊びたいから……それに、心配なんだ」

遊びは…ついでだ。けど、心配しているのは本心。

「由夢ちゃんや義之もお姉ちゃんの事、すごく心配してるよ？」

「最近だれとも話しなくなって、ご飯もほとんど食べてないしさ、このままじゃ病気になるんじゃないかって……」

「……いいの。私は、病気になりたいんだから」

……へ？…ちょっと待って?!

「いやいや!?病気になんかになったら、由夢ちゃんも義之も家族みんながすごく悲しむよ？」

「いいのっ！……このままずっとご飯食べないで、病気になって……そうしたら、お母さんと同じところに行けるんだから！」

音姉は、叫び声のように…いや、悲しい声で、泣きながら叫んだ。

やっぱり…原因はお母さんのことだった。音姉と由夢の母親……由姫さんが亡くなった…からだ。

……俺がもっと原作について詳しく知ってれば助けられたかもしれない。……けど、助けられなかった……。何やってんだよ俺…。

「だけど、お母さんと同じところに行ったら、みんなに会えなくなっちゃうんだよ？」

「……いいの」

「…いいわけないって！みんな、お姉ちゃんの大事な家族なんだから！」

「だって……私とは、違うもん。みんなには私の気持ちはわかんないんだもん！」

分かんないって……そんなわけ……。

「分かんないわけないだろっ！俺だって由姫さんが亡くなって……も

う、これ以上誰もいなくなって欲しくないんだよ！どうしてそんなこと言うんだよ!!」

俺は言葉を吐き捨てるように言った……途中、言葉がめちゃくちゃで、子供ぽくない言い方になっていることに気がついた。

「えっ？……」

「いや、あのさ……そうだ！」

話をそらそうと思い付いたのは義之と特訓したあの魔法。

「これ、食べて…元気だしてよ…」

手のひらに力を込めて出したのは自分でも上出来だと思える『イチゴ大福』だ。

どうしてイチゴ大福かって？それは、俺が和菓子の中で一番好きだからだ。

「……え？」

驚いた音姉の表情。ありゃ？イチゴ大福嫌いなのかな？

「…ちょっと酸っぱいかもしれないけど美味しいと思うよ…」

イチゴ大福は手から初めて出したからな。鉄板なのを出せば良かったかな？って少し後悔した。

「これ、どうしたの？」

「えぇーと、魔法って言ったら信じてくれる？」

「魔法？」

「うん、魔法。……って信じられないよね？」

「……」

うわー。どうしよ。ますます、悪い方向に進んでるんじゃね？音姉は、俺が持っている和菓子をじっと眺めている。

「その、……和菓子嫌い？」

「ううん、そんなことない」

そう言って、俺の持っていた『イチゴ大福』に手を伸ばし、口にはこんだ。

「……不味い」

くそー。見た目だけかよ。もうちょい練習すれば良かった。

でも、

「……あはは」

俺の出した和菓子を持ちながら、音姉が笑っていた。……音姉の笑った姿ここに来てはじめてみた。

結果オーライってとこか？

「君も魔法が使えたんだね」

小さく笑った後、音姉は俺のことを振り返った。

「それじゃあ、お返し」

音姉の手のひらの上には鉄板中の鉄板。『饅頭』がそこにあった。

「え？」

そうだった…。音姉も魔法使えたんだったよな。忘れてたわ…。

「あはは。和菓子、嫌い？」

違う意味で驚いている俺を見ながら、音姉が楽しそうな笑みを浮かべている。

「……お姉ちゃんも魔法使えたんだね」

「うん。だって私は正義の魔法使いだから」

「正義の魔法使い？」

……あぁー、そんなことなんか聞いたような？……聞いてないような？

「そう。それより、食べないの？」

おっと！音姉に促されるように一口で食べた。

「…うまい」

きっと俺が出したのとは格段と違う旨さなんだろう。そこいらに売っている和菓子より旨い。

「でしょ？」

そう言いながら、ニコニコと嬉しそうに笑う。さっきまでとは全く違う雰囲気で。

良かった元気？になってくれて。俺は、音姉の笑顔が見えて嬉しかった。

「ねぇ、弟くん」

「え？」

確か今、音姉の口から『弟くん』って……？

「だって君は、私の家に住んでいるんだから、私の弟みたいなものでしょ？

それに、私ばっかりお姉ちゃんって言われるのも不公平な気がするし

だから、弟くん。文句ある？」

少し不安そうに見つめながら言ってきた。———文句か。普通ならないよな。

「いや、ないよ」

そう答えると、音姉は安心したようにな笑みを浮かべた。

「魔法が使えることは、二人だけの秘密だからね」

「秘密……あぁーそっか」

そうだよなー。日常茶飯事に使ってるとこ見られたら不振に思われるし、気味がられるよな。

俺、音姉の前で使ってしまったし。危ないな、これから気つけるか。

「うん。それは、私の正義の魔法使いだから。

困っている人がいたら助けてあげる、正義の魔法使い

正義の味方って正体を隠すものでしょ？」

……はい？なんだよ、そういう意味かい！アニメの主人公でよくある設定みたい……

……てかアニメの影響だろ。

「だから、二人だけの秘密。わかった？」

「う、うん…わかった」

俺は、しぶしぶ返事をする。

「それと、秘密を共有するってことは、二人は一心同体になるんだよ」

「一心同体……ってちが…？」

おい？使い方間違ってなくね？良いのかこのままで？もうどうにでもなれ!!

「…？私もよく分かんないんだけど、何か困ったことがあった時とかは助け合う関係なんだって

で、弟くんは…私と一心同体でいい？」

……音姉が不安そうな瞳で覗き込んでくる。選択肢は……ひとつしかないよな。

…俺は由姫さんとのことを思い出していた。…約束。ちゃんと守るよ。音姉と由夢、二人のことを守ってみせる。

言われたから守るって訳でもない。家族となってみんなが俺にとってかけがえのない人たちになったからだ。

「うん、いいよ」

「それじゃあ指きり」

俺の小指と音姉の小指が縮まる。…指きりってなん十年ぶりだろう…。

「指きりげんまん、嘘ついたら針千本飲ます、指きった！」

言い終わると小指と小指は離れた。音姉は安心したかのように俺をみている。

つい数十分前とは全然違う。明るい笑顔で微笑んでいる。

「これで、私たちは一心同体だからね」

「うん…じゃあ。由夢ちゃんと義之のところに行こっかお姉ちゃん」

そう言いながら俺は、手を差し出す。

「うん！弟くん！」

音姉が明るくなって本当に良かった。怒ってばかりの音姉じゃなく、いつも笑顔でみんなを元気にしてくれる音姉が……本当の音姉だと。

「それよりさ、弟くん？どうしてさっき口調が変わったの？」

…忘れてくれてよかったのに。

～音姫ｓｉｄｅ～

私を元気付けようとしに来てくれた弟くんにひとつ疑問があった。

「それよりさ、弟くん？どうしてさっき口調が変わったの？」

たまに見せる大人びた顔。私は、気になっていた。

「さっき、いつもは『僕』っていってるのに『俺』って言ってたよ？」

「…その。言わなきゃダメかな？」

……その言い方だと何かあるのかな？

「……一心同体」

困ったことがあったら助けてあげたい。そう思いながら呟いた。

「……お姉ちゃん、誰にも言っちゃダメだよ。ぼ…俺…転生者なんだ」

真剣な目で弟くんが見つめてきている。

「てんせいしゃ…？」

「うん…こことは違う世界…から来たんだ」

弟くんが、嘘を言っているようには思えないそんなお話だった。

今は分からなくてもいいから覚えていてっと言われた。

彼のその意味を知りたくて私は、弟くんのことをもっと知りたくなった。

あのころの記憶

～陵ｓｉｄｅ～

「はぁ～」

「陵くん、ため息なんてついてちゃ幸せ逃げちゃうよ？」

俺は今小学校に行っている。やっぱり義務教育だからだよな…。

正直２回も行くはめになるなんて思いもしなかったけどな。

「あぁ。ついてたのか俺？」

「うん。どうしたの、陵くん？勉強分からないの？」

「いや？今のところは大丈夫」

「ふーん、そうなんだ。それよりさ今日は何して遊ぶ？」

…勉強より遊びかよ。まぁ、俺もそっちの方が勝ってるけどな。

「そーだな。今日は、家でゲームするか？」

「うん！早くクリアーしたい、早く帰ろ！」

元気いいなー。そう思いながら義之に思いっきり引っ張れながら帰った。

「弟くん、これは分かる？」

……俺、今日義之とゲームするんだったよな？今はどう考えたって音姉と勉強中だ。

「うん…なんとなく」

「えぇーそんなことないよね？お姉ちゃんが教えてあげるよ」

さっきからこの調子だ。義之は、というと……隣で寝ている。

家に帰ってきてからゲームをするはずが、音姉に呼び止められた。

『ねぇ、弟くん達。宿題は？』

『後でやるよー』

……宿題あるの忘れてたわ。義之の一言で思い出した。

『ダメだよ！お姉ちゃんが見てあげるから一緒に勉強しよっ！』

……そして今に至る。

宿題はさっき終わった。しかし、そのまま解放されずに勉強をしている。

「私ね、弟ができたら勉強教えたかったんだー」
「由夢ちゃんじゃダメなの？」
「弟くんじゃなきゃ意味ないのー」
音姉はニコニコしながら言った。
……なんだよそれ。まあ、音姉の教え方は上手いから別に良いけど。
しかし、音姉が明るくなったな。あの暗くてムスッとしたまんまかと思ったぐらいだ。俺がここに転生してきて話が変わったのかと内心ひやひやしてた。
「これであってる？」
「んーどれどれ？…うん！あってるよ」
「じゃあーそろそろ……」
俺が立ち上がろうとする。
「あぁーダメダメ。次はこっち！」
「えぇー。もう今日は勉強いっぱいしたじゃん」
「…じゃあ、勉強はやめよっか。その代わりお話ししよ」
話？まぁー勉強よりかはいいか。義之も寝てるしな。

「話なら、別にいいよ」

「じゃあ……」

～音姫ｓｉｄｅ～

私はさっきまで弟くん達の勉強をみていた。義之くんは寝ちゃったけど…。

由夢ちゃんは、友達と遊びに行っておじいちゃんは何処かに行っていないみたい。

だから彼について聞いてみた。

「じゃあ……ねぇ、今は楽しい？」

「う、うん…楽しいよ」

「前と比べてどう？その…転生？する前と今は……」

「……正直、転生する前のことは、忘れかけてた……ここにいる時間が長くて忘れかけてるのかな？」

弟くんの話…なんだか不思議な話だけど…。

そう思いながら私は聞き入っていた。

～陵ｓｉｄｅ～

「……正直、転生する前のことは、少しずつ忘れかけている……ここにいる時間が長くて忘れかけてるのかな？」

昔の俺どういうやつだったけ？

――――――

「おーい、陵！これ面白いからさ見といてくれや」

「なんだよそれ？最近のアニメか？」

「ちげーって！少し前のアニメだけどさ、これ面白いからさお前にも見せたくてさ」

そうだ…これは俺が転生前の出来事。

アニメ好きの友達がいてよくオススメのものを貸してくれていたな…。

「今日中にみといてくれよな！」

「へーい」

今回はなんのアニメだ？放課後になり、家に帰ってさっそく貸してくれたＤＶＤを再生した。

あいつが貸してくれるアニメにはハズレがない。そこまでアニメ

を愛しているやつ……アイツ、顔は良いのに趣味がこれだからなー…元気にしてるかな？

…そういやD．C．Ⅱのアニメを紹介してくれたのもアイツだったけ？

――――――

「はは……」

「どうしたの、弟くん？」

「いや、なんでもないよ」

「…？」

忘れちゃいけない。今も昔も俺って意外と幸せもんなんだな。お前の好きなアニメの世界で楽しくやってるよ。

～雄二ｓｉｄｅ～

俺は今夢を見ている。どうして夢って分かるかなんて……

それは、アニメ好きの友とアニメについて語っているからだ。

そいつとは、塾が一緒で同じ趣味で話しやすい。

「でさーあれ面白いよな！」

「あれな面白いよな！だから俺、他のやつに貸したんだー」

「誰だよ、そいつ。アニメ好きなのか？」

「同じクラスのやつでさー。俺が貸したやつちゃんとみてくれて良いやつなんだぜ」

俺の学校ではこんなアニメ好きのやつなんかいないから、こいつと話をするときは楽しい。

「あぁ～、俺もこの主人公みたいにハーレムつくりたいわ」

「お前、いつもハーレムばっかり言ってるよな。そんなの現実じゃ無理だろ？」

「別に良いだろーてか、現実じゃ考えてないから」

…だって俺、お前みたいにかっこよくないし。

どうして神様は不公平なんだよ。

…あぁ、アニメの世界に行きたい。どうして二次元ってこんなに、魅力を感じるんだ？

って毎日思ってたな。

「…そうかい。じゃあなーまた明日、塾で」

「うん、また明日……」

もっと話したかったな。明日も学校かー疲れる。

…そう思うと今は見慣れた天井。朝か、目が覚めたんだな…。

はぁ～。にしても、早く風見学園に入学したいわ。そして、薔薇色の学園生活にしてやる！

……さぁ、今日も1日頑張るか。

そうして俺は、パジャマから学校に行く服へ着替えだした。

なんにも企んでないし！…うん。

２０５５年３月１５日の朝――。

～陵ｓｉｄｅ～

ひら、はら、と目の前の横切る花びらが眠気を誘発する

「「ふあ～あぁぁ～あぁ…」」

義之と同時に桜並木で大あくびを連発した。

季節は巡り俺は付属の2年生になった。幼少期から思いっきり飛んだ？まぁ、気にするな。ご都合主義。笑

毎日退屈することなく今日も学校に向かう途中だ。

しかし今日は俺にとって楽しいイベント風見学園の卒業式だ。別に卒業式が楽しいのではなく、卒業式後の『卒パ』が楽しみだからだ。

この風見学園はお祭り好きなのか『卒パ』の他に『クリパ』やらパーティーが年に何回も行われている。

そして今日がその『卒パ』の日。

「義之―お前も眠いのか？」

「陵もかよ…ふあぁぁぁ～」

「弟くん達、眠そうねぇ」

隣を歩いている音姉が、クスッと笑っていた。

「なんか楽しみすぎて寝れなくて…」

「そんな分かりきった嘘ついてもバレバレですよ、兄さん」

そう俺の会話に入ってきたのが由夢だ。

「どうして嘘って言いきれるんだよ」

義之の隣でニマニマしながらいる由夢に問いかけた。

「だって兄さん達、1週間くらい前から張り切ってたもんね」

「そうなの弟くん?」

由夢が余計なことを言うから音姉が怪しんでる。

「俺は、違うよ」

義之は即座に否定した。俺はってなんだよ。お前俺だけ売ったな?

「音姉も、いちいち信じるなよ。てか、由夢だって眠そうじゃん?俺らと一緒じゃん」

「わたしは卒パがかったるいだけだよ。兄さん達と一緒にしないで」

そう言いながら由夢は、俺らと同じぐらいの欠伸をした。なんだよそりゃ？

由夢は、学園内では優等生で通っているが家ではまったくもって違う顔…そう猫をかぶっている

まぁ心を開いてるって思えば…うん。

「俺らと変わらんぞ？その欠伸」

「違うってばー」

俺と由夢が、がみがみ言い合いながらそれを微笑ましく音姉と義之が見ている。

俺と義之が、朝倉家に厄介になって１０年ほど経とうとしていた。

初めは、さくらさんの家で厄介になるつもりだったが、さくらさんは魔法の桜のバグがなくなった後も家を空けがちなため、今は純一さんを含め５人で住んでいる。

「じゃあ何も企んでないの？」

「俺は企んでないよ」

また義之が俺だけ売りやがった。

「弟くんは、企んでいるの？」

そういや、音姉も由夢も俺と義之をまとめて呼ぶ時は『弟くん達』『兄さん達』って呼ぶけど

俺一人だけ呼ぶ時は、それぞれ『弟くん』『兄さん』と呼んでいる
義之に関しては、『義之くん』、『義兄』と呼んでいる。
俺も義之のように、『陵くん』、『陵兄』ってな感じでもいいんだけど。
……まぁ本人達が気に入ってるから良いか。
「企むわけないじゃん…」
「最後の方、少し聞こえにくかったよ兄さん」
「由夢！お前！」
「だめだよ、弟くん。お祭り大好きでも、やってイイこととダメなことがあるんだからね？」
いやだから、まだやるとは決めてないし。うん…まだな。
「弟くんいい？くれぐれも変な騒ぎは起こさないでね。いくら私が生徒会の役員でもかばいきれないんだからね」
「お姉ちゃん、兄さんに言っても無駄だよ」
二人は俺を信用してないのか？ふむ…切なくなってきたわ。
「兄さん達は、ぜ―ったいになんかやらかすからね！」
「俺もかよ!?」
義之も含まれていた。さすが妹。

「俺も信用ないのかな？」

「もってことは俺確定なのかよ？はあ～俺はもっとへこむわ…」

そんな感じで４人で登校していると、

「おっす、陵！義之！」

バス停の方向から声が聞こえてき

「よっ、おはよ」

「お、バス通組か？おはよう」

俺と義之が声のする方に挨拶をした。

渉と杏と茜たちがバスから降りてきてこっちにやって来た。

渉は、俺と義之の悪友。いつもこいつを含め悪さ？…まぁ仲良くしている。

杏は、一言でいうとロリだな。これに限るか。

茜は、大人顔負けのボディの持ち主だ。正直同い年にはみえない。

この３人とは、クラスは違っているが、１年の時からばか騒ぎする時は何かとつるんでいる。

しかし、今日のこの卒パではライバルである。

俺と義之は１組

涉は2組

杏と茜は3組

最高の仲間にして最高のライバル。ライバルが多ければ多いほど燃えると言うが、これはこれでかなりの強者揃いだ。

「ふふ、ちゃんと逃げずにやってきたことだけは褒めてあげるわ」

「義之くん達にのクラスには、ぜ―ったいに負けないんだから」

「俺らも杏達のクラスには負けないしな。な、義之？」

…そう今回ばかりは、絶対に負けられない。

「あ～どもども」

涉は、俺たちに挨拶を済ませると調子よく音姉と由夢の所に擦り寄っていった。

「おはようございます、音姫先輩。オハヨ～、由夢ちゃん♪」

「おはよう」

音姉は、にっこりと挨拶を返した。

「おはようございます、先輩方」

さっきまでとは、別人のようにすまし顔で挨拶をしている…さすが猫かぶ…

「兄さん、顔に出てますよ。後で覚えていてくださいね」

え？最近よく俺の思っていることがバレる。いや？そんなはずはないと思うけど…鋭い由夢だな？

「おはよう」

「おはようございます」

杏と茜も、音姉と由夢に朝の挨拶をしていた。さっきまでとは、態度が全然違う。お前らすごい切り返しだな。

そんな感じで、しばらく7人でおとなしく登校していた。

が、校門をくぐるとき渉が鼻を鳴らしながら

「義之ど―だ？1組の様子は？」

俺らを見下しているのか、直球すぎる言葉だった。

自分のクラスが俺らより勝っていると思っているのかこいつ？

まぁ、こいつの回りくどい言い方じゃないから一応エール交換のつもりかなんかだろう。

しかし、敵に情報をやるほど甘くはない。俺からしたら、今日会った瞬間から戦いは始まってた。

義之がどう対処するのか考えていると

「小恋のクラスだから、どうせ対した準備もしてないんでしょ？」

「昨日も自信なさそうにしてたもんねぇ、小恋ちゃん」

二人は、小馬鹿にしてるのか心配しているのか。どっちにしろ腹がたった。

「ふふ、俺たちにも奥の手があるんだ。後で吠え面かいても知らないからな」

よく言った義之。やるからにはとことんやってやるしな！

「わぁ、大きく出たねぇ」

「すごい自信ね。…義之達のバックにはあいつもいるし…」

そう…あいつがいるからな。今年の卒パも盛り上がれそうだ。

「それもそうだな。でも、こっちにだって最終兵器がいるからな！お前らになんかにぜってー負けねーからなっ！」

そう言いながら渉は教室まで走っていった。最終兵器？2組の最終兵器ってなんだ？

「いきましょ、茜」

「うん。お互いベストを尽くそうね。じゃあね」

杏と茜も、教室の方に先に向かって行った。

「相手にとって不足なしだな」

「俺らの1組の力をみせてやろうじゃん」

義之と俺はその決意に燃えて拳を握った。

あれだけ眠たかった眠気がいつのまにか消えていた。…上等じゃん。

「兄さん達、絶対になにかやらかすつもりだよ!!」

「もう……」

姉妹の心配をよそに二人は燃え上がっていた。

「「おはよ（～さん）」」

俺と義之が挨拶をしながら教室に入るとすでにほとんどのクラスメイトが揃っていた。

「あ～、義之ぃ～、陵ぅ～」

月島小恋が小走りでやってきた。

「どうしたんだよ、朝っぱらから不景気な面しやがって、そんなんじゃ今日は乗りきれないぞ」

「だってぇ～」

義之が小恋をいじっている

俺たち2人は小恋とは幼馴染みで、毎年同じクラスにあたってい

る、長い長い腐れ縁…にもほどがあるんじゃないか？ってぐらいの仲だ。

「だってもくそもない、ちゃんと進んでるから心配すんなよ」

「だけどさ～」

どうして心配するんだよ？昨日よりかは、確実に進んでいるし、今のところ問題は無さそうにしか見えない。

飾り付けや点との準備はほとんど終わっていて、残るは食材がくるのを待つだけじゃないのか？

…だけどなんだ？昨日より熱中ぶりが嘘のように感じる…なんでだ？

そんなことを考えながら

「委員長おはよ～さん」

「いいんちょー、おはよ」

義之と俺は現場の指揮をとっている女子に挨拶をした。

「おはよう、桜内…佐々井…」

クラス委員長の沢井麻耶。

委員長は、目も合わさずに応えた。いつもの委員長とは違い力もとないな？

「どうしたんだよ？順調に進んでるしなんとかなるだろ『焼きおにぎり屋』」

俺が『焼きおにぎり屋』と言った瞬間に委員長がため息をついた。

…まぁ。大体予想はついていたがな。今さら後戻りなんかできないし、現実を受け入れるしかないだろ。

「ねえ、いったんは引き下がった身で、今さら話ぶり返してもしょうがないけど……もう一度言わせてもらっていい？」

「……」

正直…聞きたくない。俺は黙りこんだ。

「…ちょっと！言わせてもらうわ！」

「わたしも言わせてもらうよ！」

小恋も横から口を挟んできた。はぁ～なんだか珍しい組み合わせだな。

「……なんだよ？」

俺の代わりに義之が対応してくれた。こういう時まじ助かるぜ義之。

「「なんで焼きおにぎり屋なの!?」」

いきぴったりな委員長と小恋であった。大声で言わなくても…鼓膜さけるっつーの。

「わさわざ声そろえなくても」
「そろえたくてそろえたんじゃないよ～」
「正直、騙された感が抜けないのよね」
3人のやり取りにクラスの大半が委員長の意見に同意しているようだ。…肩身が狭く感じる。
「べつに、俺達が決めたわけじゃねーし」
さすがに義之だけじゃかわいそうだから話に加わわった。
「そうよ！そもそもあいつが決めたんだから佐々井から言ってよね！」
「そうだよ。代表して、陵が言ってよね」
「どうして俺が？…別にいいじゃね？おもしろそうだし」
定番な店よりもインパクトあった方が面白いと思うんだけな？
「おもしろい？そう思ってるの陵だけなんだからー」
「佐々井、お願いだからあいつにーーー」
「…騒がしいな。なにを言い争っている？」
1組の諸悪の根元が、ようやく教室にやってきた。…別に俺は思ってないぞ？

「きたか……遅いぞ」

義之は、杉並をにらんでいた。

こいつは、杉並俺と義之の悪友一人。

成績優秀、運動神経抜群の男だがこいつがかなりのくせ者。悪友でもかなりの要注意人物だ。

「すまんな、高坂まゆきに追われていたのでな」

「そりゃ、遅くなるか」

高坂まゆきっていうのは、音姉と一緒で生徒会の一員。それゆえ、なにかと問題を起こす杉並を目の敵にしている。

「なんかバレたのか？」

「そんなところだ」

くそー。何がバレたんだよ。…俺の楽しみがひとつ減ったというのに、杉並は涼しそうな顔をしている。

「で、なにを言い争っていたのだ？」

「お前が提案した『焼きおにぎり屋』が不服みたいだぞ？」

一応さっきまでの流れをひとまとめして説明した。

「まだそんな話をしていたのか？すでに決着はついていると思っていたのだがな、委員長よ」

委員長は図星なのか顔が少しひきつった。

「…そうかもしれないけど、納得いかないものはいかないの」

「そうだよ。こんなので本当に勝てるの？」

委員長と小恋が杉並に不満をぶつけている。

「ふむ、そんな疑問を抱いているのか……。ならば、敢えて言わせてもらおう……勝てる!!」

杉並はきっぱりと断言した。…言いきりやがったわ。

どうしてこれだけもめているかって？

ことの発端は、一週間ほど前にさかのぼる。

ことの発端～回想～

～陵ｓｉｄｅ～

話は一週間前にさかのぼる。

俺たちは、卒業式のリハーサルに駆り出されていた。

付属の3年生は、卒業とは名ばかりで、ほとんどの生徒が本校へ進学する。

しかし、本校の3年生は本来の意味での『卒業』だから、残りの5学年が総力をあげて送り出さなければならない。

とは言っても……。

「うむ、暇だな……」

杉並からは、退屈のオーラを隠そうとしていない。

「杉並もか……」

「ふあああぁ……」

無理もないっか。総力を結集した卒業式とはいえ、やることは毎年変わらない。

しかも、リハーサルなんてダルくて力入らないしな。式はほんと退

屈だよな。

そら、由夢たち1年生は初体験だけど、俺らにとっちゃ、二回目だ。

今年が無事に終わっても、まだ3回も同じことしなくちゃいけないんだよな。

「まぁ、リハーサルはよいとしてだな、佐々井、桜内」

「「ん？」」

「当日の我々の活動だが……」

「なにすんだ？」

「また、なにかやらかす気か？」

俺は喜びながら、義之は少し呆れながら。

けど、退屈なものは退屈だしな。義之も心の中では同じこと思ってるだろう。

実際、俺ら三人はどうしようもなく退屈が苦手だからな。

たぶん渉も退屈してそうだな。

「当然だろう？我々は我々なりの誠意で卒業生を送り出さねばならん。」

…待ってましたー。そうこなくちゃな。

「一部の卒業生は、我々の破壊工作を猛烈に期待していると聞き及んでいるぞ」

「そんなもん、一部だろ……」

ありゃ？義之が反論してるや。けど、真剣に止めるつもりはないみたいだな。

…てか、杉並がいったん本気になったら俺たち止めれるのか？……無理だよな。

「マイノリティを馬鹿にしてはいかんな。それに他の連中だって、口ではなにも言っていないが、期待しているに決まっているだろう？」

「堅っ苦しい式になるより俺は良いと思うけどな。」

「うーむ……」

「せーしゅくに！みんな、せーしゅくに！」

そんな声が聞こえたと思ったら、壇上に生徒会長が立っていた。

「どーも、会長の磯鷲です」

この人たしか噂によるとかなりのキレ者だと言われてる本校2年の生徒会長だよな？

その脇には、音姉やまゆき先輩など、本校1年生の生徒会役員たちが並んでいる。

ざわついていた全校生徒が、会長のいる壇上を注目した。

「えー、皆さんも知っての通り、卒業生であり前生徒会長である宮代雪乃さんは、歴代の生徒会長の中でも類稀なほど偉大な方でした」

そんな人だったけ？印象薄いな。

「我々在校生は、その前会長の卒業を祝うとともに、彼女から受けた多大なるご恩に対し恩返しをしなければなりません！いや、しなければならないのです！」

今の生徒会長が熱く語っている。

回りの生徒たちや卒業生は唖然としているし、生徒会役員達は、苦笑いだ。

「そんなに偉大だったけ？」

義之にも印象が薄かったみたいだな。

「まぁ、よい好敵手ではあったな。このまま亡くすには惜しい人材だ」

「いやいや、死んでないだろ」

一応ツッコミを入れておいた。ピンピンしてんぞ。

「今の会長は、正直ヌルいからな……高坂と朝倉姉がいなければ、現体制では、敵として不足。我々と互角にやりあうことは不可能だ」

「そこで！来る３月１５日、皆さんが楽しみにしている卒業パーティー――――通称『卒パ』を、例年より盛大に行いたいと思っております！」

ざわざわと生徒たちがざわめきだした。はぁ？どういうことだよ？

「つきましては、卒パにおいて一番売り上げを上げたクラスには、超豪華賞品を贈呈したいと思います!!」

辺りからおぉ！という歓声が一斉に上がりだした。

それとは反対に生徒会の役員たちの苦笑いは消え去り、表情が何やら重たく見える。

ありゃー初耳だったんじゃね？明らかさっきとは、態度が違うしな。

すぐ隣で、杉並は何やらさっきとは違う企みを、練っているのが分かる。

「前会長のために！皆さん！卒パを！思いっきり！盛り上げてください！」

「か、会長、聞いてないですよ！」

「そんな予算、どこから出るんですか!?」

まゆき先輩と音姉が、顔色を変えながら食いついている。がちかよ？

「あんたたちは知らないでしょうけど……こんな時のために、少しずつ経費を節約していたのよ！」

「え～!?」

「だからって、無茶です！」

音姉が悲鳴を上げ、まゆき先輩はさらに食いついている。生徒会の役員も大変なんだな。

「ええい、うるさい!!足りない分はポケットマネーよ！あんたたちからも出してもらうからね？

前会長ＢＡＮＺＡＩ！

宮代会長ＦＯＲＥＶＥＲ！

あ、こら……なにするの、やめなさいっ！」

現生徒会長は、役員の人らに両脇から捕まえられて追放……。

「こら、放しなさい、朝倉！高坂！放さないと更迭よぉ！決定は覆らないからねぇぇーー!!」

生徒会長の声が体育館に響く。

「……ま、まゆき、黙らせて」

「会長、御免！」

うわっ？会長の脇腹に思いっきり入ったし!?えっと……大丈夫なのか？

まゆき先輩の拳がみごとに、脇腹に刺さった生徒会長は白目を剥いて気絶している。そのままズルズルと連行されている。

「……聞いたか？」

「しっかりとな」

「前言撤回。現会長もなかなかのタマだな」

「違う意味でだな……」

正直、呆れた。

「ふふふふ、佐々井、桜内、破壊工作はなしだ」

……まぁ、この状況だしな。狙うは、やっぱり……

「まさか？豪華賞品を？」

義之が、杉並に尋ねる。

「いただきだな」

「…けど、あんな決定、通るのか普通？どう思う、陵？」

「そうだよなー、あのままじゃ生徒会役員が揉み消すんじゃないか？」

まゆき先輩と音姉ならやりかねない。

「お祭り好きの学園長の事だ。決定を覆すようなことはせんだろう」

「言われてみれば…」

「念のため、他の役員たちに裏工作はしておくが……お前たちも協力しろよ？とくに朝倉姉は、お前にとことん甘いからな」

と言いながら俺を指差した。

「えっ、俺？義之じゃねえの？」

「……陵、頼んだよ」

なんだよそりゃー。

そうこれがことの発端なのだ。

俺たちは卒業式のリハーサルが終わり、教室へ戻る途中だった。

「えええぇぇ!?」

そんな奇声を放ったのは小恋だった。何人かが何事かとふり返っている。

さっきまで話していたことを歩きながら小恋に説明した。そしたら、もっともらしいリアクションが返ってきた。

「……でも、一番になんてなれるの？」

「『なれるの？』ではなく、なるのだ」

「本校のクラスとかも出展するんだよ？」

「月島、今から弱気になってどうする？」

「はうぅ……」

「そうだな……あいつらか」

義之はなんだか別の事を考えてるみたいだな。

「おう。敵は、恐らく、本校の先輩たちじゃない…身近なやつらだと思う」

「あぁ、同感だな」

杉並も心当たりがあるみたいだ。

「えっ？誰のこと陵？ふぇ……？」

……さっきから、邪悪な視線を背中に感じていたがいたのか。

「悪いな。この勝負、俺たちの勝ちだ」

「正直、負ける気がしないわ」

そこには、渉と杏が不敵な笑みを浮かべながら立っていた。

「なんだ、お前らもノリノリじゃん？」

「当たり前だ」

「こんな面白そうな企画、乗らない方がどうかしてる」

……さいですか。二人とも厄介なやつだし…敵に回りたくなかっ

たわ。

「そういえば、うちのクラスなんだっけ？」

「……俺に聞くな」

……二人とも話聞いてなかったのかよ。

「俺らのクラスはフランクフルト売るんだぞ！」

「二人ともちゃんと話聞いてなかったの？」

杉並はともかく、義之は話に参加してただろ？どうせ上の空だったんだろう。

「ふ、フランクフルト屋か……」

「限りなく無難だな」

話に参加してなかった二人にはその思われ方は気にくわないが……豪華賞品を狙うにはなんだかインパクトに欠けているように思えた。

「ふふふ、今から企画を変えて間に合うかしら？」

「じゃあ、おまえら、何かすごいことを企画してるのかよ？」

「さて、どうでしょう？」

義之が杏にはぐらかされている。

「ま、せいぜい奇策を練ってくれよ。もともと、うちのクラスはこんな事態にならなくても売り上げ上位は確実だったわけだしな」

「そういや2組って何やるんだ？」

「……さ～てね」

杏に引き続き、またもはぐらかされている。

「私、知ってる……」

「俺も知ってるぞ…」

ちっ、と渉が舌打ちをする

「「白河（ななか）のディナーショーだよな（ね）？」」

俺と小恋は、声を揃えて言う。そら、面白そうな出し物は調査済みだからな。

それを聞いてか、義之は衝撃を受けていた。

「まじかよ…ななかって……あの白河ななかなのか？」

「「おう（うん）」」

「バレちまっちゃあしょうがねーな」

そうだよな。あの白河だと勝ち目ないかもな……。

なんたって風見学園のアイドル的存在で、先輩後輩問わず、人気が

あってファンもたくさんいるって聞いてるし。

「そりゃ、強敵だな……」

「悪いな義之。白河を擁している時点で、うちのクラスは2歩も3歩もリードしてるんだ」

義之ほんと何も知らなかったんだな？学園中噂になってるのに。

「で、3組は何をやるんだ？」

話をそらしたのか義之は杏に話をふった。

「知りたい？」

渉と違って言ってくれなさそうだな？別に俺は、知っているけどな。

「いや、別に……」

「無理しちゃって。知りたいくせに……」

義之の無防備な首筋に息を吹き掛けながら杏に弄られている。

「う、うわっ……よせって」

「杏！」

小恋がさすがに止めに入った。

「やーね、冗談よ。冗談」

「相変わらずシャレが通じないのね、小恋は」

「う～っ」

「で、３組は何をやるんだ？」

ありゃ？杉並も知らないのか？やっぱり普通のお祭りじゃ興味わかないのか。

「セクシー・パジャマ・パーティー」

「はい？」

「だからセクシー・パジャマ・パーティーよ」

杏はニマリと笑ながら繰り返した。名前だけじゃピンとこないよな。俺だって初めはイメージすらつかなった。

「んー」

あれ？小恋も知らなかったのか？てっきり杏か茜に聞いてて、知ってるつもりだと思ってた。

「ぐはぁ！」

渉はピンときたようでよからぬ妄想をして、口を押さえている。

やめてくれよ、他の生徒がビックリしてんじゃん。

「け、けっこうやるじゃねーか」

「お前、わかるのか？」

「ああ……さすが雪村杏……やることがエゲつないぜ」

義之はまだ理解できてないのかよ。

「義之ーそのまんまだよ、話によると女子たちがパジャマ姿で接客してくれるらしい」

「な、なんだってー!?てか陵、知ってたのか？」

「あぁ、面白そうな店だったから一応調査済みだ」

「…義之、ようやく恐ろしさが分かったか……」

「あぁ……てか確か3組は……」

「そうだ。学年きっての巨乳と噂される花咲茜がいる。それに、こいつ……」

「そ。私がロリ担当。幅広くニーズに応えるわ」

義之と渉は3組の店についての話をしながら二人の目に輝きを感じる。てか杏、自分で言うなよな。

「ちなみに、参考までに聞かせてもらうが、杏……」

渉は情報収集？いや自分の貪欲を満たすために聞いてるな。

「なぁに？質問はひとつまで許可するわ」

対する杏は、小悪魔のような笑顔だ。

「貴様の当日のパジャマはどんな感じだ？」

「男物の大きめのセーター一枚よ」

「「なんだって!?」」

俺と義之と渉は同時に叫んだ。はぁ？そこまでは聞いてなかった。てかそれってパジャマなのか？

「ち、ちなみに……ズボンは……」

渉は、まだ訊く気のようだった。渉…男の中の漢だな。

「もちろん……そんなものはないわ」

「げふっ」

次の瞬間、渉は膝をつきながら倒れた。妄想がピークに達したのか？

「わ、渉っ」

義之が心配をしている。けどあいつもなんだかフラフラしてる。

「や、やるじゃねぇか……。一度ならず、二度までも……」

「で、くるの？こないの？」

「もちろん、空き時間を見つけていかせていただきます！」

渉……折れたな。てか敵に貢献するのかよ？

「ありがと。席はリザーブしておくわ。義之と陵は、どうするの？」

「え？えーと……」

「そら、面白そうだから……」

「ダメ、行っちゃダメだからね！」

小恋が止めに入ってきた。いや？義之はともかく……俺も？

「いやいや、どうして俺も？」

「だって！陵が行くって言ったら義之ついて行くから二人ともダメっ!!」

……さいですか。小恋は、義之の肩をつかみ激しく揺すっている。

「わ、わかった、いかない。いかないから、揺するな。揺するなって……脳が揺れる！」

「絶対ダメだからね！」

「なんなら、小恋用の席もリザーブしておいてあげるわ」

「そ、そんなのいかないもん」

「運動部で鍛えられた生え抜きの男子をビキニ姿で４、５人はべらせ

てあげるよ」

…それじゃあ、パジャマパーティーじゃなくなるし。

「いいよ、いいよ！」

小恋は顔を真っ赤にしながら首を横にふった。

「我慢することないのよ？」

「してないもん！」

「小恋の大好きな割れた腹筋よ？」

「そんなの好きじゃないもん！」

「ふふふ。無理しちゃって……」

「う～…」

小恋は、杏に完全に遊ばれている。弄られキャラだから仕方ないか。

「ともかく、俺らは手を抜かないつもりだ。あんまり手応えないのも面白くないから、張り合うつもりなら、もうちょっと出し物考えろよ？」

「空き時間にフランクフルト、食べに行くから。空き時間があったら……の話だけど」

渉と杏がそう言いながら悠然と去っていった。

「あいつら……」

「なんか、勝てそうもないね……」

「…そうだな。」

気にくわないが、出し物も出し物だし。今の俺たちじゃ到底、歯が立たないだろう。

「いや、勝つぞ」

「「はぁ？（え？）」」

義之に火がついたのか？

「豪華賞品なんてどうでもいいが、あいつらだけはヘコましてやらにゃ気がすまん……だから、やるぞ、杉並！」

しかし返事がなかった。

「そういえば…あれ、杉並は？」

俺は辺りを見渡しながらさっきまでいたはずの杉並を捜した。けど、どこにもいない。

「二人とも、杉並くんなら、とっくの昔にいなくなったよ？」

…いつの間に。…まったく気づかなかった。

「いつ？」

「えーと、杏がセクシー・パジャマなんとかって言ってたくらいかな？『対策案を練る』っていっちゃったよ」

さすが杉並、行動が早いな。

「…そうとなったら、俺たちも作戦を考えに教室に戻るか！」

「そうだな！」

「う、うん！」

義之を筆頭に俺と小恋は急いで教室に戻った。

クラス一つに…超豪華賞品のためだ！

～陵ｓｉｄｅ～

「はぁぁぁ!?」

俺たちの教室の方からなにやら声が聞こえてきた。……あの声たぶん委員長だな。

そう思いながら俺たちは教室に飛び込んだ。

「悪い、遅くなった」

義之が謝りながら教室にはいると、杉並と委員長を中心にクラスメイトたちが集まっていた。

「ねぇ、佐々井？桜内？どっちでもいいからちょっと翻訳してくれない？さっきから、杉並が何を言いたいのか、さっぱり分かんないんだけど？」

委員長は俺たちの方を向きながら疑問を投げ掛けた。…委員長なんだか怒っているように見えるんだが……。

「あぁ、どちらでもいい…すまないがこの凡人にも分かるように、噛み砕いて説明してやってはもらえんか？」

その言葉に委員長の怒りが増したように見えた。おいおい…さす

がに言い過ぎじゃないか？誰だって起こるぞ？さっきの言い方なら。
杉並は、悪気があって言ったわけではないと思うが……
「えーと、経緯はわからないが、たぶん、杉並はこう言ったんじゃないか？『卒パで行う予定だったフランクフルト屋をやめにしないか』……と」
義之が杉並の言いたいことを代弁した瞬間、クラス内から感心する声が上がった。
「惜しい。非常に惜しい！俺はもう一歩進んでるんだぞ、桜内」
「え？」
「この馬鹿は、こう言ったのよ、『喜べ。たった今、業者に注文しておいたフランクフルトを、無事にキャンセルしてきたぞ』……って」
……まじかよ。さっきまで杏と渉と話してたのに杉並、手が早すぎじゃないか？
「なんだ、通じてるんじゃないか」
「通じてないわよ！ぜんっぜん意味わかんない！せっかく、私が安い業者を見つけてきて、注文とったっていうのに！」
「そんなんでは、売り上げ1位は望めないだろう？」
「はぁ？オーソドックスな売れセンを、これでもかってくらい安値で仕入れるのよ？それ以外どんな――「甘い。甘いぞ、委員長。それで勝てるほど、世の中は……いや、風見学園の卒パは甘くないのだ」……どーしてよ？」

委員長はそろそろ我慢の限界がきているようだった。

「桜内、説明してやれ」

「また俺かよ？」

俺は説明するのが苦手だからこういう面倒なことは義之任せだ。

義之がさっき話してた2組と3組の出し物について説明した。

「なにそれ……」

「風俗かよ……」

「ぶっちゃけいきてーな……」

「バカ……」

義之が、説明し終わるとクラスの反響はすごかった。特に男子からは……。

「そんなわけで、俺たちもそれ相応の対処をしないと1位は望めないというわけだ」

義之がそう締め括ると、委員長はあきれ返っていた。

「バッカみたい。無理に1位を狙う必要なんてないんじゃないの？」

「しかしな……」

「いいのか委員長？俺たちのこと、あいつらに完全に舐めてたぞ？」

今さっきの出来事を思い出した。俺たちなんか相手にされてない言い方。今になって怒りが込み上げてきた。

「佐々井、それ本当なの？」

委員長は人一倍プライドが高いからな。もう一押しか？

「あぁ、言ってたぞ……「2組の板橋と3組の雪村が、しょせん沢井麻耶なんて小物が委員長やってるクラスじゃ、勝負にもならないって嘲笑ってたな…」…いや、おい義之……」

そこまで言ってはいない…。

「こ、小物？こ、この私を……」

委員長が、ギリ、と歯を軋らせた。目には殺意を感じる。やり過ぎたんじゃね？

「義之ぃ」

小恋が義之に抗議の眼差しを向けている。そうだよな、杏とは友達だし、渉とも仲良いからカチンとくるよな？

「いいからいいから」

義之は、小恋を小声でなだめた。

「わ、分かったわ。……この勝負勝ちましょうっ！」

そう言いながら委員長は拳を突き上げながら宣言した。

――――――

「あのときは、あんなにノリノリだったくせに……」

義之がヤレヤレとため息ながら言った。

「う、うるさいなぁ乗せたのは、桜内たちでしょ！」

「普通にやってら勝ち目がないのだ。俺の選択が正しい」

「……どうかしら？」

「なぜ焼きおにぎりなのか、今一度説明せねばならんようだな」

「何度も聞いたわよ！」

……そう委員長の言う通りなん１０回も聞かされたんだから…。

「では、説明してもらおうではないか――――俺の言ったことを一字一句違えることなく！」

「え、えっと……荒んだ現代社会において、最も必要なのはヒーリング、すなわち『癒し』であ～る！」

「口調まで真似するか……」

委員長の律儀な対応に見ていて面白い。

「う、うるさいわね。一字一句って言ったじゃないっ」

「その通りだ、委員長」

「……そ、その『癒し』を体現するために、この不肖杉並が提案するキーワード……それは、即ち『手作り』であります！」

「そう。そうだ、わかっているではないか」

杉並は一人興奮しながら委員長の発言に何度もうなずいている。

「しかも、ただの手作りでは弱すぎる。そこで、登場するのがおにぎりだ。ナマの手で直接握るというプロセスを踏んで完成する神聖な供物――――それがおにぎりなのだ！」

委員長が一字一句間違えずに言い切った。さすが委員長だな。

「そう…まさに、『手』作りっ！分かるか？美少女が直に握った銀シャリを、そのまま口に放り込むんだぞ！これは正直エロい！」

クラスの男子たちが、うんうんと頷いている。女子には届いてないみたいだが。逆に引いたように見える。

「そう言われると、握る気なくすよねぇ……」

小恋がクラスの女子の意見を代弁して言った。

「……」

委員長もなにやら顔が険しくなっていた。

「言わんとしていることは分からんでもない。」

「そうだよな。てか最初の『癒し』から、だんだんかけ離れていっているのは気のせいか？」

義之と俺は疑問を投げ掛けた。『癒し』がかけ離れて気持ち悪くなったように感じる。

「気のせいだ！美少女のナマの手が握ったおにぎり！いける！これぞ兜率の天の食と評しても過言ではないのではなかろうかっ!?」

杉並が熱く力説する。が…

「なーにが、兜率の天の食よ！先週は、その口車に気圧されたけど、冷静になって考えてみたら、やっぱり———」

「何を言うか！このコンセプトは、風見学園男子共の脳下垂体を必ずや直撃する！

そして、これを成し遂げることが可能なのは、お前たち美少女しかいないのだ!!

頼んだぞ、美少女たち！」

「…び、美少女……」

あれ、委員長？どうしたんだ？

「そうだ、美少女！ちがうか、美少女!?」

委員長の頬が、しだいに紅潮していた。

「委員長……ああいう言葉になれていないから」

そういうことか。委員長照れているのか。小恋がそっと、吐息を漏らしていた。

「頼んだぞ、美少女っ!!」

「……そ、そうね。じ、自信ないけど…頑張ってみる」

委員長の目が完全に泳いでいる。こうなったら、完全にお手上げみたいだな。

「あ～あ、陥落しちゃったよ」

「なんにせよ、よかったよかった」

「わたしは納得してないよぉ～」

「ここまできたら、やるしかないだろ?」

「う～……」

「そう、ゴネるなよ……」

小恋が義之の腕を掴んでうったえた。今さら企画変更はできないだろうし。しゃーないだろ。

てかよく焼きおにぎり屋も生徒会から承諾できたよな?握るとなったら衛生面とか大丈夫なのかと思ったが、ことは進んでるみたいだしまあ…いいか。

「桜内、要領は同じだ。月島に言ってやれよ」
「な、なにをだよ？」
「それは貴様が考えろ」
この流れだと美少女だよな。てか義之言えるのか？
「う…」
小恋の目が輝いているし、頬も赤らめている。明らかに言ってもらうことを期待している。
「す、杉並が言えよ……」
「お前だから意味があるのだ。なぁ、月島？」
「えっ？あ、う～ん……ど、どうかな？」
「さあ、桜内。超豪華賞品のためだ」
「うぐ…」
「義之、言ってやれ」
俺も杉並と一緒に義之を急かす。
「あの、さ……小恋」
義之が決心したのか小恋の方に向きなおった。

「ひゃ、ひゃい……」

小恋は義之を目の前にし、テンパっている。

「び……び、びしょ……」

「……い、言えねぇ……」

「義之……頑張れよ後少しだ」

「……陵が言ってくれよ…」

「それじゃ、意味ないんだよ」

「……はぁ」

小恋が、諦めたようにため息をついた。同時に見届けていたクラスメイトからもため息が聞こえた。

「と、ともかく！小恋ならできる！小恋ならやれる！一緒に頑張ろうぜ！」

「う、うん……頑張ってみるよ」

まあ、義之にしては上出来だな。小恋は、残念そうな顔をしたがちょっとは喜んでるみたいだ。

「よく言った！では、1位を目指して頑張るぞ。いいなっ！」

杉並が全員に檄を飛ばした。

クラスメイトたちは賛同したみたいにまわりから『おおーっ』と聞こえてきた。

「頑張ろうね、義之♪」

「そーだぞ。義之頑張れや」

「陵もだよっー」

「はいはいとっ」

かくして、クラスは再び一つにまとまった……杉並によって。

じゃあ俺は……の偵察に

～陵ｓｉｄｅ～

「終わったねぇ……」

小恋はさっきまであった卒業式の余韻に浸っていた。

卒業式はというとリハーサル通り進んで終わった。

卒業していく卒業生には卒業証書が授与され、感極まって泣き出す生徒がちらほらいた。

在校生も卒業していく先輩のことを思い泣いている人もいた。

もみくちゃになりながら第2ボタンをとられてた卒業生もいたな。

だが……。

「ん？なにが？」

義之は、教室で極太の羊羹にかぶりついていた。

「はぁ…義之お前な～」

「……って、何食べてるの？」

小恋が、呆れたように言及していた。

「見てわからないのか？これは羊羹だ」

「それはわかるけど…」

「言っとくが、やらんぞ」

「いらないもん。今、そんなの食べたら、焼きおにぎり食べられなくなっちゃうよ？せっかく、味見してもらおうと思ったのに……」

「だいじょうぶ、和菓子は別腹だから」

「そんなこと言って、太っても知らないからね」

「大丈夫、大丈夫」

…あいつ手から和菓子だしたんだな。小さい頃に義之から教えてもらった魔法。

義之は、純一さんから教えてもらったみたいで、今はかなり上達している。

一応俺も、同じ魔法が使える。

しかし、義之の場合は自分のカロリーを使って作るからプラマイゼロだ。

今、小恋に言った『別腹』ある意味正しいかもな。

「…で、なんだって？」

義之は、羊羹を口に放り込みながら言った。

「んもう。義之のせいで感動も台無しだよ」

「いいから言ってみろよ」

「もー、卒業式も無事終わったね、いい式だったね、って言おうと思ったの！」

そう小恋は言いながら頬を膨らませていた。

「あぁ、普通にいい式だったな」

これほど平和に卒業式が終わり拍子抜けしていた。生徒会役員も厳重に警戒していたが何も起こらず。俺たちと一緒のような感じだった。特にまゆき先輩は……。

杉並が騒ぎを起こさないってのも別に悪くないなと思っている自分と、騒ぎがあるから普通だったなって思う自分がいる。

まぁ、問題を起こせば超豪華商品が、なかったことになっていたかもしれない……。

そう、今は卒パの売り上げが大事だからだ。

「……いや、終わりではないぞ。ここからがはじまりなのだ」

「そうよ。こうなったら、超豪華賞品とやらを拝んでやろうじゃないの！」

「というわけで、だ。まもなく開店準備は整うわけだが、佐々井と桜内

はどうする？」

杉並が俺たちに訊ねてきた。

「ん？どうするって？」

義之が訪ね返した。

「もちろん、我々にしかできないことをやるのだ。すなわち……」

「……敵情視察ってわけか？」

「さすが佐々井だ、話がはやい。午前中のうちにまわっておきたいから、お前たちは二手にわかれて偵察してきてくれ」

「えー、焼きおにぎり屋さんを手伝ってくれるんじゃないの？渉くんや杏たちが偵察にきた時にも、いてほしいよ」

「なーに、強制ではない。どうしてもというなら、この杉並が行こうではないか」

「でも、杉並がうろついていると、それだけで相手に警戒されるかも」

委員長が偵察するのに杉並はまずいのではないのか？とそんな感じに言っているようだった。

「案ずるな。そんな下手を打ったりはしない」

「どうする陵？お前はどっちに行きたい？それとも残るか？」

「…できれば偵察に行きたいな。義之はどうするんだ？」

「そっか、じゃあ俺は……俺も偵察してくるよ…クラスは…3組を」

「雪村杏……侮れない存在よね」

委員長も相当警戒してるみたいだな。

「わかった。じゃあ俺は、2組の偵察に行ってくるわ」

「そっちのクラスは任せたぜ、陵。渉たちのクラスはだいたいどんなことをやってるか想像つくけど、油断するなよ！」

「任せとけって！」

「ふむ。でわ、お前たちよ。場合によっては、その場で破壊工作をしてきても構わんぞ」

「そうね。お願いするわ。彼女たち…学校行事にふさわしくないことしてそうで、なんだか怖いのよね。まぁ、念には念を入れなさいってことよ」

…委員長らしからぬ発言で一瞬ビックリした。

その時、中庭の方から空砲の合図が聞こえた。卒パが開始された合図だ。

「よし！俺行ってくるわ」

義之が教室を出て行こうとする。

「義之ぃ……」

小恋はよっぽど不安なんだろうな。心配そうな目で義之を見つめている。

「ん？」

「気をつけてね……」

「大袈裟だなぁ」

「危なくなったら、逃げてもいいんだよ？」

なんだ？この夫婦のようなやり取り？よそでやってくれよ。

「まぁ気をつけるさ」

義之は、教室から出ていった。

「じゃあ、俺も行ってくる」

「陵も、気をつけてね」

「了解っと。てか杉並どうすんだ？」

「なに、色々策を練っているから気にするな」

「そっか。なら行ってくる」

俺も義之の後を追うように教室から出ていった。

…さーてと、2組は『白河ななかのディナーショー』だよな。偵察

頑張りますか。

セクシー・パジャマ・パーティー偵察編ｐａｒｔ１

～義之ｓｉｄｅ～

杏たちのクラスを偵察してくるとやって来たのはいいが……どうしたらいいんだ？

…陵はうまく偵察してんのかな？…そんなことより今は自分のことだ。よし、偵察に専念するか！

そんなこと考えているといつの間にか３組の前まで来ていた。

情報によるとパジャマ姿のウェイトレスが給仕する喫茶店だそうだ。

本当かどうか怪しいところだが入ってみなくてはわからんな。

…てか、普通に客として入っていけばいいんだよな？んー、どうしよう。

「早速きたわね？」

敵の本拠地手前で悩んでいると聞きなれた声が聞こえてきた。

「お、おまえ…」

そこに、杏が立っていた。

「チャオ、義之」

「な、なんて格好してんだよ！」

予告通り、杏はセーター一枚のスタイルだったのだ。

体型は子供っぽいのに、想像を遥かに越えた過激で何よりVネックにより強調された胸元は犯罪的だ。

こんなの渉が見たらすぐさま倒れこむだろ?!

「どう?男子たちの夢のシチュエーションを体現してみました」

「体現しすぎだ！」

「素直に喜びなさい。オタカルチャーはリサーチ済みよ」

「リサーチだかなんだか知らないが、客引きのためにそんな格好まで……」

「あら?私、普段からパジャマはこれよ?」

「そ、そうなのか?」

「こういうことは徹底しないとね。だって、そのほうが燃えるでしょ?」

「うむむ……」

やばい。反論できない。学校では制服姿しかあまりみないから新鮮すぎて何も言えなかった。

てか反則すぎだろ。

「茜！義之がきたわよ」

「ホント？」

教室のドアが開くと茜が出てきた。

「お、おまえもか……」

茜は茜で、杏とは違う刺激的なパジャマで現れた。ヤバい。このクラスはグラマーな生徒がいっぱいすぎるだろ！

かなり刺激が強すぎてくらっと目がくらみかけた。

「あれ？陵君はいないの？」

「あぁ、俺一人だ。陵がいなくて残念だったか？」

「えぇ、残念だわ。利益が少ないじゃない。仮に二人が来ても私たちなら相手にできたわよ」

「そうだけど…てっきり二人で来るかと思ってた。まあ…いいっか。ささ、入って入って！」

「いや…、俺は…」

…偵察だなんて言えないし。

「敵情視察なら、客として入ったほうがてっとりばやいでしょ？」

…なんだ。バレてたのか。
そう言われながら杏は右手を握りながら、左手は茜が握りながら教室に連れ込もうとした。
いや？杏の握り方ってこれ…恋人繋ぎじゃないか!?
「ちょ、杏！」
「減るもんじゃないしいいじゃない」
「義之くんの席には、私たちがついてあげるね」
「……はぁ？席につく？」
「は～い、一名様ご案内～」
こうして俺は3組の『セクシー・パジャマ・パーティー』に潜り込む？入ることができた。

白河ななかディナーショー潜入part1

～陵side～

義之とそれぞれのクラスを偵察するということで俺は2組の教室前へときていた。

なんたってこっちは学園のアイドルと言われている白河さんを売りにしているからな…今回卒パの売上、上位に入りそうだよな…

小恋でさえも白河さんの人気を複雑な思いを込めた表情で称えていた。てか…偵察ってどこまでやればいいんだ？

普通に客として乗り込んでパーティーに参加すればいいのか？…そう2組の前で悩んでいると

「お！陵じゃねーか！」

2組の主催者である渉に見つかってしまった。

あまりに入ろうか迷っていたのが裏目に出てまったく気づかなかった。

「渉か…」

「なんだ？偵察か？」

お察しのいい通りで…ってここでうろちょろしていたら流石にわかるか…。

まあ、隠しても仕方ないことだし…

「まあ、そんな感じってとこだよ」

「結構、結構。殊勝な心がけじゃねーか」

しゃーないここはおとなしくしておくか…

「そういうお前は何やってんだ？」

「見てわかんねーか？呼び込みだよ、呼び込み。まあ、呼び込まなくても客入りは上々だけどな」

「あはは…そう、みたいだな」

そう、言いながら俺はクラス前にはすでに行列といって言い人を見ながら答えた。

「お―い、一名様、ご案内だ～！偵察だそうだから、低張におもてなししてやれ～!!」

おい…余計なこと言うなよ…偵察の意味が全然ないじゃないか…そう渉が言いながら俺は行列を無視し、クラスの中へ案内され『白河ななかディナーショー』へと入ることとなった。

～雄二ｓｉｄｅ～

今日は待ちに待った卒パがついに開幕され俺はというと…呼び込みを任されていた。
本当はウェイターをやらされるはずだったが今の時間帯は呼び込みをまかされていた。人の多い中庭でダラダラと呼び込みをしていた。

「えぇー白河ななかのディナーショー…いかがですかー今なら席も空いてまーす…」

ダラダラしてると板橋の奴に怒られそうだが…関係ないね！なんたって、俺の，ななかが主役として駆り出されているからだ。

ななかもいやいやそうな顔だったが俺だって超豪華賞品とやらが気になるし今回はななかごめんなっと思いながら歩いていると

「…ねぇ？あの人かっこよくない？」

「え？…ほんとだ！かっこいい！」

俺の方を見ながらそんな声が聞こえてきた。…服装からして風見学園の生徒ではなさそうだな。また俺注目浴びてるのかよー、この容姿だと俺かなり目立つからなー。

俺は付属に入るころからだんだんかっこよくなりだし今に至る。この容姿は神様に願ったおかげでモテはするけどいろんな女が寄ってきて大変な時もある。

俺はななかや他のD．C．に登場するメンバーだけで十分なんだけど…けど周りのモブキャラもかわいくてたまんねやー。そんなことを思っていると

「あのー？お一人ですか？」

先ほど話していた一人の女がおれに話しかけてきた。

「へ？あ、俺のこと？」

急に話しかけられたので慌てて返事をした。

「はい！そうなんですけど…お時間よろしければ学園を案内してくれませんか？」

女は俺に顔を赤らめながらもじもじしながらそう言っていた。くそーなんだよものすごくかわいいじゃねーか!!今からでもほぽって案内したいぐらいだぜー。

しかし超豪華賞品の為、ななかも頑張ってるし俺も頑張るしかねーよな…。

「あぁ…ごめんね俺今呼び込み中だからせっかく話しかけてくれたのに…今度さ時間あったらその時よろしく」

俺はそう言いながら2人の女にウインクをした。これぐらいやったら大抵の女はいちころだから俺は慣れたように右目をつむる。

「きゃー!!」

そんな声を聴きながら俺は中庭を後にした。しかし、一応原作をこよなく愛している俺からすれば大体の内容知ってるから行動しやすいよなーと振り返る。

俺がいることでクラスのメンバーが変わるかと思ったらそうでもなかったし、今のところ原作通りにすすんでるっかな？

別に俺としては、俺が主役で『高橋雄二のディナーショー』とか企画されてもよかったのにな！今の俺なら進んで行動できるしなんにでも出来るだろ？

渉に代わって司会もできると思うんだけどなー。

そういや？1組はなんだっけ？そう思い廊下に張ってあった紙をみると…

『おいしいおにぎりをあなたに！真心こめてにぎって待ってます！ぜひ1組へどうぞ！

』

そんな張り紙が張られていた。せっかくだし、焼きおにぎりを握っている小恋や委員長のとこにでもいこうかな？けど今行ったら杉並に偵察だと思われそうだしー。どうしたものかと考えていると…。

クラスメイトの奴が俺のとこにやってきた。

「雄二ー頼む！ななかちゃんを説得してくれないか？ボイコットして大変なんだよ…」

俺の姫はわがままだなと思いながら、俺は自分のクラスへと戻ることにした。